

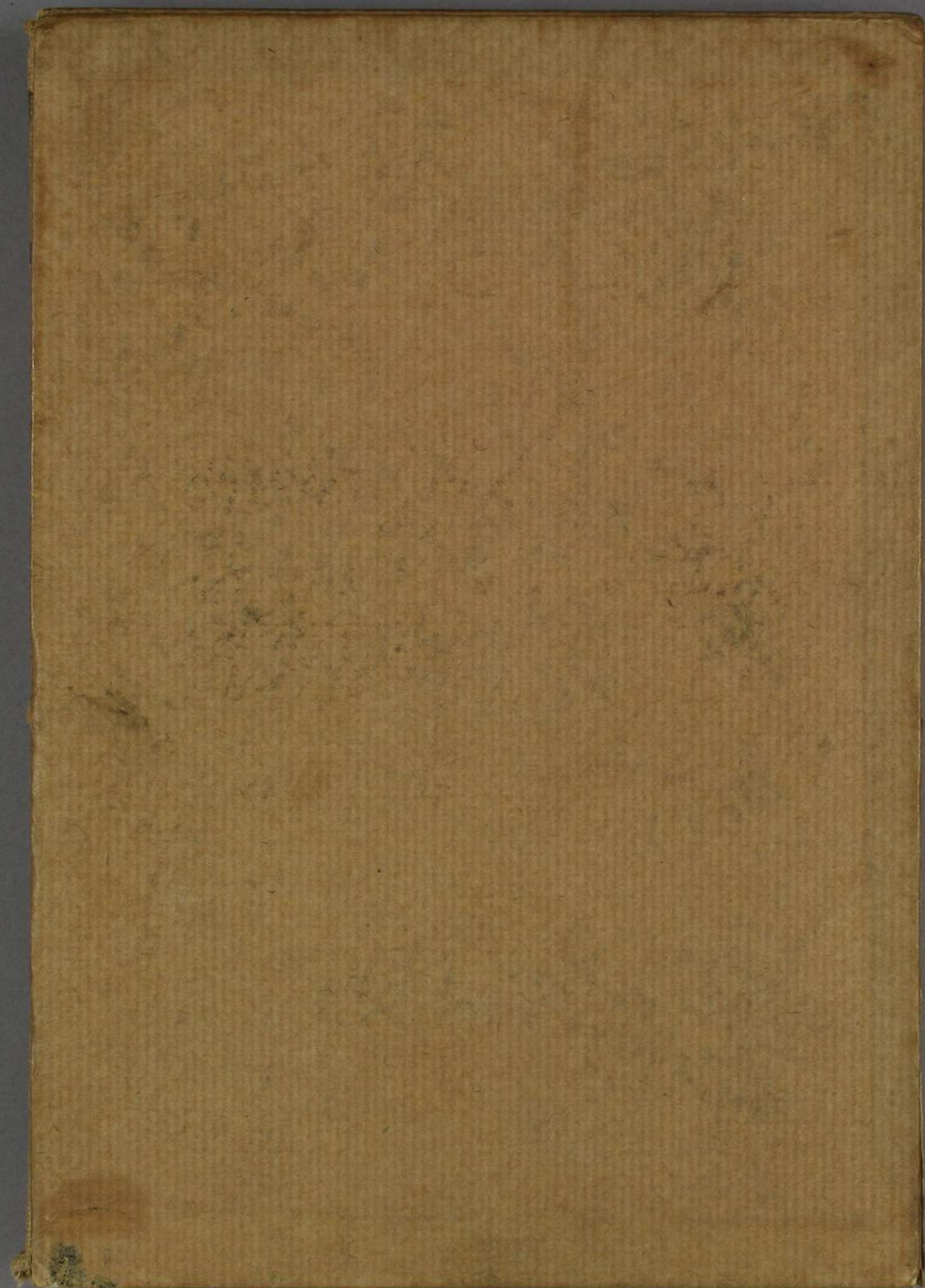
春修程

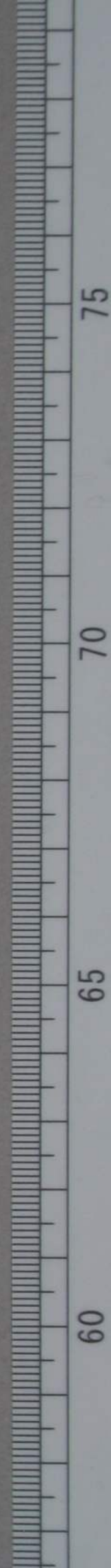
心象又今三甲

宮沢賢治

春と儻
四段

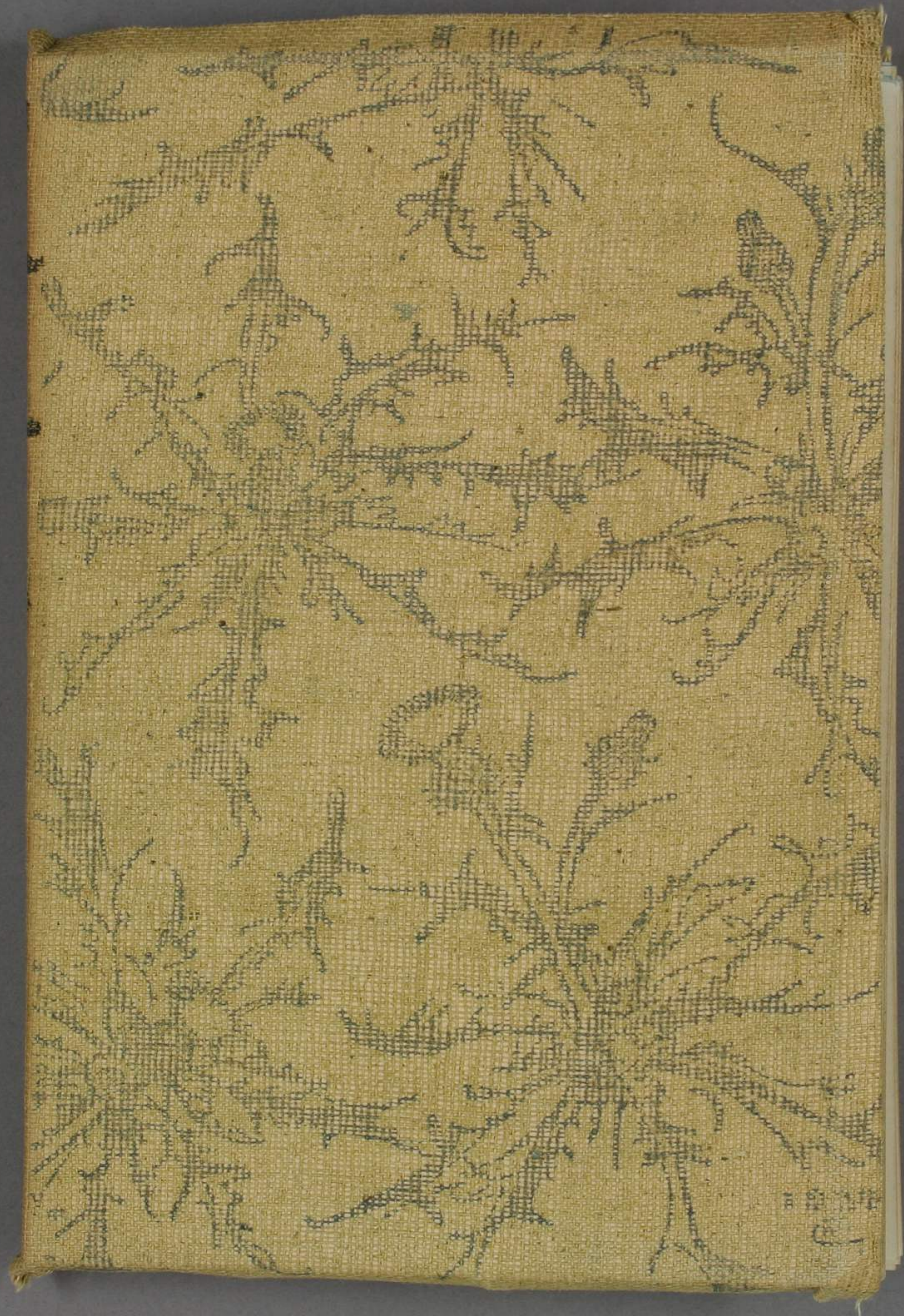
宮沢賢治

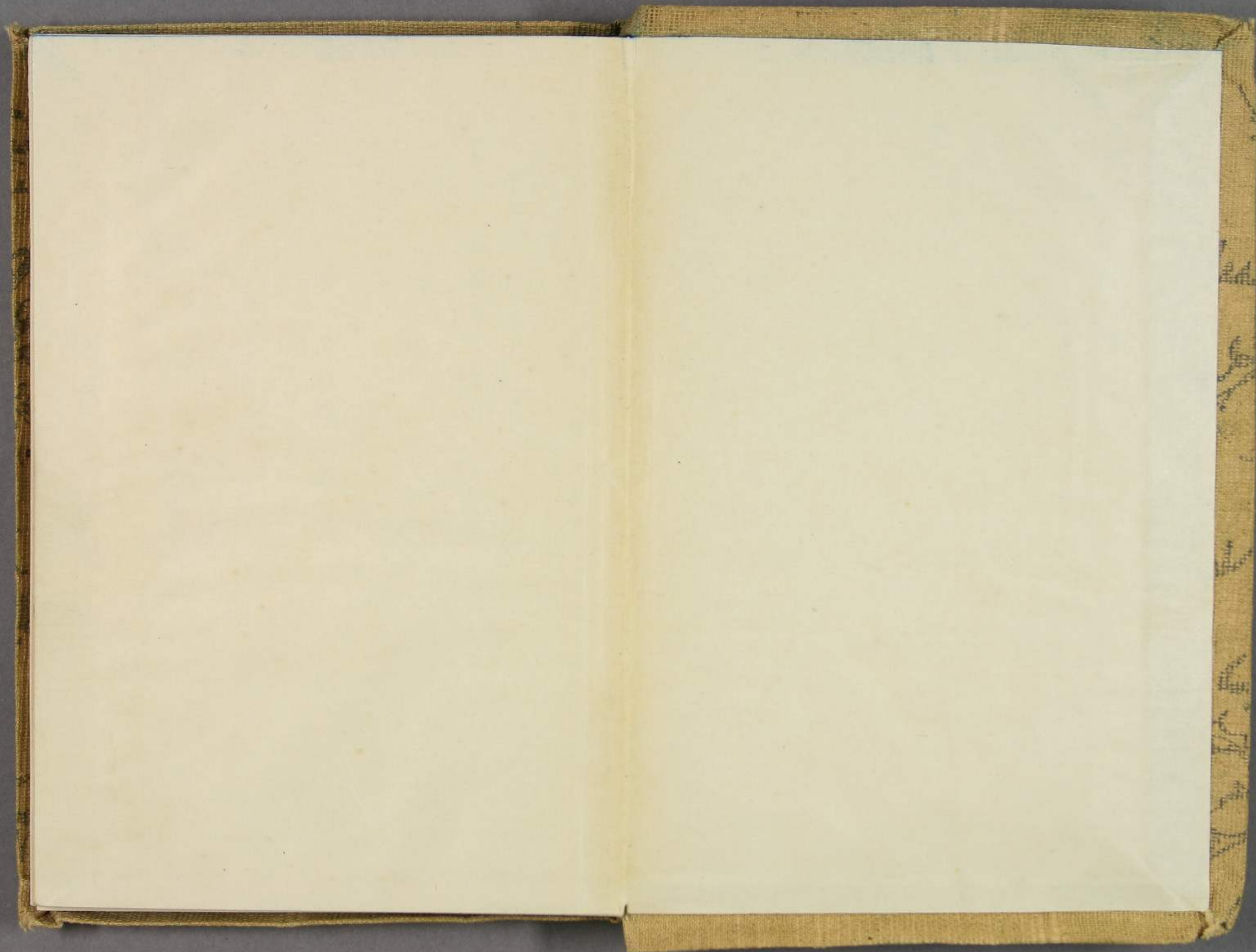




續武庫羅

續武庫羅





心象スツケチ

春
ミ
修
羅

大正十一年

心象スツケチ

春
ミ
修
羅

大正十
一、二
年

序

わたくしといふ現象は

假定された有機交流電燈の

ひとつの青い照明です

(あらゆる透明な幽霊の複合体)

風景やみんなといつしよに

せはしくせはしく明滅しながら

いかにもたしかにともりつづける

因果交流電燈の

ひとつの青い照明です

(ひかりはたもち、その電燈は失はれ)

これらは二十二箇月の
過去とかんずる方角から
紙と鑛質インクをつらね

(すべてわたくと明滅し

みんなが同時に感ずるもの)

ここまでたもちつゞけられた
かげとひかりのひとくさりづつ
そのとほりの心象スケッチです

これらについて人や銀河や修羅や海膽は

宇宙塵をたべ、または空氣や鹽水を呼吸しながら
それぞれ新鮮な本体論もかんがへませうが
それらも畢竟こゝろのひとつの風物です
たゞたしかに記録されたこれらのけしきは
記録されたそのとほりのこのけしきで
それが虚無ならば虚無自身がこのとほりて
ある程度まではみんなに共通いたします
(すべてがわたくしの中のみんなであるやうに
みんなのおのおのなかのすべてですから)

けれどもこれら新世代沖積世の
巨大に明るい時間の集積のなかで

正しくうつされた筈のこれらのことばが
わづかその一點にも均しい明暗のうちに

(あるひは修羅の十億年)

すてにはやくもその組立や質を變じ
しかもわたくしも印刷者も

それを變らないとして感ずることは

傾向としてはあり得ます

けだしわれわれがわれわれの感官や

風景や人物をかんずるやうに

そしてたゞ共通に感ずるだけであるやうに

記録や歴史、あるひは地史といふものも

そののいろいろの論料デ、マといつしよに

(因果の時空的制約のものにと)

われわれがかんじてゐるのに過ぎません

おそらくこれから二千年もたつたころは

それ相當のちがつた地質學が流用され

相當した證據もまた次次過去から現出し

みんなは二千年ぐらゐ前には

青ぞらいつばいの無色な孔雀が居たとおもひ

新進の大學士たちは氣圈のいちばんの上層

きらびやかな氷室素のあたりから

すてきな化石を發掘したり

あるひは白堊紀砂岩の層面に

透明な人類の巨大な足跡を

發見するかもしれません

すべてこれらの命題は

心象や時間それ自身の性質として
第四次延長のなかで主張されます

大正十三年一月廿日

宮澤賢治

春
こ
修
羅

屈折率

七つ森のこつちのひとつが
水の中よりもつと明るく
そしてたいへん巨きいのに
わたくしはでこぼこ凍つたみちをふみ
このでこぼこの雪をふみ
向ふの縮れた亞鉛あえんの雲へ
陰氣な郵便脚夫きゆうぶのやうに
(またアラッディンアラッディン洋燈ランプとり)
急がなければならぬのか

くらかけの雪

たよりになるのは
くらかけつづきの雪ばかり
野はらもはやしも
ぼしやぼしやしたり黝んだりして
すこしもあてにならないので
ほんたうにそんな酵母のふうの
朧なふぶきですけれども
ほのかなのぞみを送るのは
くらかけ山の雪ばかり

(ひとつの古風な信仰です)

日輪と太市

日は今日は小さな天の銀盤で
雪がその面を
どんだん侵してかけてゐる
吹雪も光りだしたので
太市は毛布の赤いズボンをはいた

丘の眩惑

ひとかけづつきれいにひかりながら
そらから雪はしづんでくる
電^{でん}しんばしらの影の藍^{いん}靨^{えい}や
きらぎらの丘の照りかへし

あすこの農夫の合^{あつ}羽^はのはじが
どこかの風に鋭く截りとられて来たことは
一千八百十年代^だの

佐野喜の木版に相當する

野はらのはてはシベリヤの天^ま末^{まつ}
土耳其^{とこ}玉^{ぎよ}製^{せい}玲^{れい}瓏^{らう}のつぎ目も光り

(お日さまは
そらの遠くて白い火を
どしどしお焚きなさいます)

笹の雪が
燃え落ちる、燃え落ちる

カーバイト倉庫

まちなみのなつかしい灯とおもつて
いそいでわたくしは雪と蛇紋岩との
山峽をでてきましたのに
これはカーバイト倉庫の軒
すきとほつてつめたい電燈です

(薄明どきのみぞれにぬれたのだから

巻烟草に一本火をつけるがいい)

これらなつかしさの擦過は

8

9

寒さからだけ来たのでなく
またさびしいためからだけでもない

コバルト山地

コバルト山地の氷霧のなかで
あやしい朝の火が燃るてゐます
毛無森のきり跡あたりの見當です
たしかにせいしんてきの白い火が
水より強くどしどし燃えてゐます

ぬすびこ

青じろい骸骨星座のよあけがた
 凍えた泥の亂反射をわたり
 店さきにひとつ置かれた
 提婆のかめをぬすんだもの
 にはかにもその長く黒い脚をやめ
 二つの耳に二つの手をあて
 電線のオルゴールを聴く

戀ご病熱

けふはぼくのたましひは疾み
 鳥さへ正視ができない
 あいつはちやうどいまごろから
 つめたい青銅の病室で
 透明薔薇の火に燃される
 ほんたうに、けれごも妹よ
 けふはぼくもあんまりひどいから
 やなぎの花もとらない

春と修羅

(mental sketch modified)

心象のはいいろはがねから
あけびのつるはくもにからまり
のばらのやぶや腐植の温地
いちめんのいちめんの詔曲模様
(正午の管樂くわんがくよりもしげく
琥珀のかけらがそそぐとき)
いかりのにかさまた青さ
四月の氣層のひかりの底を
唾つばきし はぎしりゆききする

12

あれはひとりの修羅なのだ
(風景はなみだにゆすれ)
碎ける雲の眼路かぜをかざり
れいらうの天の海には

13

聖玻璃せいはりの風が行き交ひ

ZYPRESEN 春のいちれつ

くろぐると光素チキネルを吸ひ
その暗い脚並からは

天山の雪の稜さへさへひかるのに

(かげらふの波と白い偏光)

まことのことばはうしなはれ

雲はちぎれてそらをどぶ

ああかがやきの四月の底を
はぎしり燃えてゆきさする

おれはひとりの修羅なのだ

(玉髓の雲がながれて

どこで啼くその春の鳥)

日輪青くかげろへば

修羅は樹林に交響し

陥りくらむ天の椀から

黒い木の群落が延び

その枝はかなしくしげり

すべて二重の風景を

喪神の森の梢から

ひらめいてとびたつからず

(氣層いよいよすみわたり

ひのきもしんと天に立つころ)

草地の黄金をすぎてくるもの

ことなくひとのかたちのもの

けらをまとひおれを見るその農夫

ほんたうにおれが見えるのか

まばゆい氣圈の海のそこに

(かなしみは青々ふかく)

ZYPRESSEN しづかにゆすれ

鳥はまた青ぞらを截る

(まことのことばはここになく

修羅のなみだはつちにふる)

あたらしくそらに息つけば

ほの白く肺はちぢまり

(このからだそらのみぢんにちらばれ)

いてふのこずえまたひかり

ZYPRESSEN 5よいよ黒く

雲の火ばなは降りそそぐ

春光呪咀

いつたいそいつはなんのさまだ

どういふことかわかつてゐるか

髪がくろくてながく

しんとくちをつぐむ

ただそれつきりのことだ

春は草穂に呆はぢけ

うつくしさは消えるぞ

(ここは蒼ぐるくてがらんとしたもんだ)

頬がうすあかく腫の茶いろ

ただそれつきりのことだ

(おちこのにがさ青さつめたさ)

有明

起伏の雪は

あかるい桃の漿をそそがれ

青ぞらにとけのこる月は

やさしく天に咽喉を鳴らし

もいちど散亂のひかりを吞む

(波羅僧羯諦 菩提 薩婆訶)

谷

ひかりの澱

三角ばたけのうしろ

かれ草層の上で

わたくしの見ましたのは

顔いつばいに赤い黠うち

硝子様鋼青のことばをつかつて

しきりに歪み合ひながら

何か相談をやつてゐた

三人の妖女たちです

陽ざしごかれくさ

どこからかチーゼルが刺し
光くわうバラフキンの 蒼あざいもや
わをかく、わを描く、からす
烏の軋り……からす器械……

(これはかかりますか)

(かかります)

(これはかかりますか)

(かかります)

(これはどうですか)

(かありません)

(そんなら、おい、ここに

雲の棘をもつて来い。はやく)

(いゝえ かかります かはります)

……………刺し

光バラフキンの蒼いもや

わをかく わを描く からす

からすの軋り……からす機關

雲の信號

あゝいゝな、せいせいするな
風が吹くし
農具はびかびか光つてゐるし
山はぼんやり
岩頸がんけいだつて岩鐘がんしょうだつて
みんな時間のないころのゆめをみてゐるのだ
そのとき雲の信號は
もう青白い春の
禁慾のそら高く掲かげられてゐた

22

23

山はぼんやり
きつと四本杉には
今夜は雁もおりてくる

風景

雲はたよらないカルボン酸
さくらは咲いて日にひかり
また風が来てくさを吹けば
截きられたたらの木もよるふ

さつきはすなつちに廐肥をまぶし

(いま青ガラスの模型の底になつてゐる)

ひばりのダムダム弾がいきなりそらに飛びだせば

風は青い喪神をふき

黄金の草 ゆするゆする

雲はたよりないカルボン酸

さくらが日に光るのはゐなか風だ

習作

キンキン光る
西班牙製です

(つめくさ つめくさ)

こんな舶來の草地でなら

黒砂糖のやうな甘つたるい聲で唄つてもいい

と また鞭をもち赤い上着を着てもいい

ら ふくふくしてあたたかだ

よ 野ばらが咲いてゐる 白い花

と 秋には熟したいちごにもなり

す 硝子のやうな實にもなる野ばらの花だ

れ 立ちどまりたいが立ちどまらない

ば とにかく花が白くて足なが蜂のかたちなのだ

そ の 手 か ら こ と り は そ ら へ

みきは黒くて黒檀まがひ

(あたまたの奥のキンキン光つて痛いもや)

このやぶはずぬぶんよく据えつけられてゐると

かんがへたのはすぐこの上だ

じつさい岩のやうに

船のやうに

据えつけられてゐたのだから

……仕方ない

ほうこの麥の間に何を播いたんだ

すぎなだ

すぎなを麥の間作ですか

柘植さんが

と ん で 行 く

ひやかしに云つてゐるやうな

そんな口調がちやんとひとり

私の中に棲んでゐる

和賀の混んだ松並木のときだつて

さうだ

休 息

そのきらびやかな空間の
上部にはきんぼうげが咲き

(上等の butter-cup^{バターカップ}ですが
牛酪^{バター}よりは硫黄と蜜とです)

下にはつめくさや芹がある
ぶりき細工のトンぼが飛び
雨はばちばち鳴つてゐる

(よしきりはなく なく

それにぐみの木だつてあるのだ)

からだを草に投げだせば

雲には白いところも黒いところもあつて

みんなぎらぎら湧いてゐる

帽子をとつて投げつければ黒いきのこしやつぽ

ふんどりかへればあたまはどこの向ふに行く

あくびをすれば

そらにも悪魔がでて来てひかる

このかれくさはやはらかだ

もう極上のクツションだ

雲はみんなむしられて

青ぞらは巨きな網の目になつた

それが底びかりする鑛物板だ

よしきりはひつさりなしにやり

ひでりはパチパチ降つてくる

おきなぐさ

風はそらを吹き

そのなごりは草をふく

おきなぐさは冠毛くわんもうの質直しちぢき

松とくるみは宙に立ち

(どこのくるみの木にも

いまみな金のあかごがぶらさがる)

ああ黒のしやつぽのかなしさ

おきなぐさのはなをのせれば

幾いくされうかぶ光酸くわうさんの雲

かはばた

かはばたで鳥もゐないし

(われわれのしよふ燕麥オシロイの種子たねは)

風の中からせきばらひ

おきなぐさは伴奏をつゞけ

光のなかの二人の子

眞
空
溶
媒

眞空溶媒

(Eine Phantastie im Morgen)

融銅はまだ眩めかず
白いハロウも燃えたたず
地平線ばかり明るくなつたり陰つたり
はんぶん溶けたり澱んだり
しきりにさつきからゆれてゐる
おれは新らしくてバリバリの
銀杏なみさをくぐつてゆく
その一本の水平なまだに

りつばな硝子のわかものが
もうたいてい三角にかはつて
そらをすきとほしてぶらさがつてゐる
けれどもこれはもちろん
そんなにふしぎなことでもない
おれはやつぱり口笛をふいて
大またにあるいてゆくだけだ
いてふの葉ならみんな青い
冴えかへつてふるえてゐる
いまやそこらはalcohol瓶のなかのけしき
白い輝雪のあちこちが切れて
あの永久の海蒼がのぞきでてゐる

それから新鮮なそらの海鼠なまこの匂
ところがおれはあんまりステッキをふりすぎた
こんなにはかたに木がなくなつて
眩くらゆい芝生しばふがいつぱいいつぱいにひらけるのは
さうとも 銀杏いんぎよ並樹なみきなら
もう二哩ふたりにもうしろになり
野の緑青ろくせいの縞しまのなかで
あさの練兵をやつてゐる
うらうら湧きあがる味爽あじさうのよろこび
氷ひばりも啼ないてゐる
そのすきとほつたきれいななみは
そらのぜんたいにさへ

かなりの影さやうをあたへるのだ
すなはち雲がだんだんあをい虚空に融けて
たうたういまは

ころころまるめられたバラフキンの團子になつて
ぼつかりぼつかりしづかにうかぶ
地平線はしきりにゆすれ

むかふを鼻のあかい灰いろの紳士が
うまぐらゐあるまつ白な犬をつれて
あるいてゐることはじつに明らかだ

(やあ　こんにちは)

(いや　いゝおてんきですな)

(どちらへ　ごさんぼですか)

なるほど　ふんふん　ときにさくじつ
ゾンネンタールが没くなつたさうですが
おききでしたか)

(いゝえ　ちつとも)

ゾンネンタールと　はてな)

(りんごが中つたのださうです)

(りんご、ああ、なるほど)

それはあすこにみえるりんごでせう)

はるかに湛える花紺青の地面から

その金いろの苹果の樹が

もくりもくりと延びだしてゐる

(金皮のまゝたべたのです)

(そいつはおきのどくでした)

はやく王水をのませたらよかつたでせう)

(王水、口をわつてですか)

ふんふん、なるほど)

(いや王水はいけません)

やつぱりいけません

死ぬよりしかたなかつたでせう

うんめいですな

せつりですな

あなたとはご親類でもいらつしやいますか)

(えゝえゝ、もうごくごく遠いしんるいで)

いつたいなにをふざけてゐるのだ

みる、その馬ぐらゐあつた白犬が

はるかのはるかのはるかかふへ遁げてしまつて

いまではやつと南京鼠なんきんねずみのくらゐにしか見えない

(あ、わたくしの犬がにげました)

(追ひかけてもだめでせう)

(いや、あれは高價たかいのです)

おさへなくてはなりません

さよなら)

苹果りんごの樹がむやみにふえた

おまけにのびた

あれなどは石炭紀の鱗木りんぼくのしたの

ただいつびきの蟻あひでしかない

犬も紳士もよくはしつたもんだ
 東のそらが苹果林のあしなみに
 いつばい琥珀をはつてゐる
 そこからかすかな苦扁桃の匂がくる
 すつかり荒さんだひるまになつた
 どうだこの天頂の遠いこと
 このものすごいそらのふち
 愉快な雲雀もたうに吸ひこまれてしまつた
 かあいさうにその無窮遠の
 つめたい板の間にへたばつて
 瘠せた肩をふるふるしてゐるにちがひない
 もう冗談ではなくなつた

晝かきどものすさまじい幽霊が
 すばやくそこらをはせぬけるし
 雲はみんなリチウムの紅い燐をあげる
 それからけわしいひかりのゆきき
 くさはみな褐藻類にかはられた
 こここそわびしい雲の焼け野原
 風のチグザグや黄いろの渦
 そらがせわしくひるがへる
 なんとといふとげとげしたさびしさだ
 (どうなさいました 牧師さん)
 あんまりせいが高すぎるよ
 (ご病氣ですか)

たいへんお顔いろがわるいやうです

(いやありがたう)

べつだんどうもありません

あなたはどなたですか)

(わたくしは保安掛りです)

いやに四かくな背囊だ

そのなかに苦味丁幾や礬酸や

いろいろはいつてゐるんだな

(さうですか)

今日なんかおつとめも大へんでせう)

(ありがたう)

いま途中で行き倒れがありましたな)

(どんなひとですか)

(りつばな紳士です)

(はなのあかいひとでせう)

(さうです)

(犬はつかまつてゐましたか)

(臨終にさういつてゐましたがね

犬はもう十五哩もむかふでせう

じつにいゝ犬でした)

(ではあのひとはもう死にましたか)

(いゝえ露がおりればなほります

まあちよつと黄いろな時間だけの假死ですな

ううひどい風だ まゐつちまふ)

まつたくひどいかぜだ
たほれてしまひさうだ
沙漠でくされた駝鳥たとうの卵
たしかに硫化水素はいつてゐるし
ほかに無水亜硫酸

つまりこれはそらからの瓦斯の氣流に二つある
しやうとつして渦になつて硫黄華りゅうわができる

氣流に二つあつて硫黄華りゅうわができる

氣流に二つあつて硫黄華りゅうわができる

(しつかりなさい しつかり

もしもし しつかりなさい

たうたう參つてしまつたな

たしかにまゐつた

そんならひとつお時計をちやうだいしますかな)

おれのかくしに手を入れるのは

なにがいつたい保安掛りだ

必要がない どなつてやらうか

どなつてやらうか

どなつてやらうか

どなつ……

水が落ちてゐる

ありがたい有難い神はほめられよ 雨だ

悪い瓦斯はみんな溶ける

(しつかりなさい しつかり

もう大丈夫です)

何が大丈夫だ おれははね起きる

(だまれ ささま)

黄いろな時間の追剥め

飄然たるテナルデイ軍曹だ

ささま

あんまりひとをばかにするな

保安掛りとはなんだ (ささま)

いゝ氣味だ ひどくしよげてしまった

ちどまつてしまつたちいさくなつてしまつた

ひからびてしまつた

四角な背囊ばかりのこり

たゞ一かけの泥炭びたんになつた

さまを見るじつに醜みにくい泥炭なのだぞ

背囊せいじやうなんかなにを入れてあるのだ

保安掛り、じつにかあいさうです

カムチャツカの蟹の罐詰と

陸稻りくはの種子がひとふくる

ぬれた大きな靴が片つ方

それと赤鼻紳士の金鎖

どうでもいゝ 實にいゝ空氣だ

ほんたうに液体のやうな空氣だ

(ウーイ 神はほめられよ)

みちからのたたふべきかな

ウーイ いゝ空気だ)

そらの澄明(ちやうめい) すべてのごみはみな洗はれて

ひかりはすこしもとまらない

だからあんなにまつくらだ

太陽がくらくらまはつてゐるにもかゝはらず

おれは数しれぬほしのまたたきを見る

ことにもしろいマヂェラン星雲

草はみな葉緑素を恢復し

葡萄糖を含む月光液は

もうよろこびの脈さへうつ

泥炭がなにかぶつぶつ言つてゐる

(もしもし 牧師さん

(あの馳せ出した雲をごらんなさい

まるで天の競馬のサラアブレットです)

(うん されいだな

雲だ 競馬だ

天のサラアブレットだ 雲だ)

あらゆる變幻の色彩を示し

……もうおそい ほめるひまなどない

虹彩はあはく變化はゆるやか

いまは一むらの軽い湯氣(ゆけ)になり

零下二千度の真空溶媒(しんくうようばい)のなかに

すつととられて消えしまふ

それどこでない おれのステッキは

いつたいどこへ行つたのだ
 上着もいつかなくなつてゐる
 チョッキはたつたいま消えて行つた
 恐るべくかなしむべき真空溶媒は
 こゝどはおれに働きだした
 まるで熊の胃袋のなかだ
 それでもどうせ質量不變の定律だから
 べつにどうにもなつてゐない
 といつたところでおれといふ
 この明らかな牧師の意識から
 ぐんぐんものが消えて行くとは情ない
 (いやあ 奇遇ですな)

(おお 赤鼻紳士
 たうたう犬がおつかまりでしたな)
 (ありがたう しかるに
 あなたは一体どうなすつたのです)
 (上着をなくして大へん寒いのです)
 (なるほど はてな
 あなたの上着はそれでせう)
 (どれですか)
 (あなたが着ておいてなるその上着
 なるほど ははあ
 真空のちよつとした奇術マジックですな)
 (まゝ さうですとも)

(ところがどうもおかしい)

それはわたしの金鎖ですがね)

(え、どうせその泥炭の保安掛りの作用です)

(ははあ 泥炭のちよつとした奇術マジックですな)

(さうですとも)

犬があんまりくしやみをしますが大丈夫ですか)

(あにいつものことです)

(大きなもんですな)

(これは北極犬です)

(馬の代りには使へないんですか)

(使へますとも どうです)

(お召しなさいませんか)

(どうもありがたう)

(そんなら拜借しますかな)

(さあどうぞ)

おれはたしかに

その北極犬のせなかにまたがり

犬神のやうに東へ歩き出す

まばゆい緑のしばくさだ

おれたちの影は青い沙漠旅行リョウカウ

そしてそこはさつきの銀杏イチョウの並樹

こんな華奢な水平な枝に

硝子のりつばなわかものが

すつかり三角にならてぶらさがる

蠕蟲舞手
アシネリダタンツエーリン

(えい、水ゾルですよ)

おぼろな寒天アガアの液ですよ)

日は黄金キンの薔薇

赤いちいさな蠕蟲ぜんちゆうが

水とひかりをからだにまとひ

ひとりでおどりをやつてゐる

(えい、エイト ガムマア エイ スイツクス アルファ)

ことにもアラベスクの飾り文字)

羽むしの死骸

いちゐのかれ葉

眞珠の泡に

ちぎれたこけの花軸など

(ナチラナトラのひいさまは

いまみづ底のみかげのうへに

黄いろなかげとおふたりで

せつかくおどつてゐられます

いゝえ、けれども、すぐでせう

まもなく浮いておいでてせう)

赤い蠕蟲舞手アシネリダタンツエーリンは

とがつた二つの耳をもち

磷光珊瑚の環節に

正しく飾る眞珠のぼたん

くるりくるりと廻つてゐます

(えい、^{エイト} ^{ガムマ} ^イ ^{スイックス} ^{アルファ})

ことにもアラベスクの飾り文字)

脊中きらきら燦いて

ちからいつぱいまはりはするが

眞珠もじつはまがひもの

ガラスどころか空気だま

(いゝえ、それでも)

エイト ガムマ アイ スイックス アルファ

ことにもアラベスクの飾り文字)

水晶体や鞏膜の

オペラグラスにのぞかれて

おどつてゐるといはれても

眞珠の泡を苦にするのなら

おまへもさつぱりらくぢやない

それに日が雲に入つたし

わたしは石に座つてしびれが切れたし

水底の黒い木片は毛蟲か海鼠のやうだしさ

それに第一おまへのかたちは見えななし

ほんとに溶けてしまつたのやら

それともみんなはじめから

おぼろに青い夢だやら

(いしえ、あすこにおいでです おいでです)

ひいさま いらつしやます

エイト ^{ガムマ} _ア *8* ^{スイツクス} ₆ ^{アルファ} *ル*

ことにもアラベスクの飾り文字)

ふん、水はおぼろで

ひかりは惑ひ

蟲は エイト ガムマア イー スイツクス アルファ

ことにもアラベスクの飾り文字かい

ハツハツハ

(はい またくそれにちがひません)

エイト ガムマア イー スイツクス アルファ

ことにもアラベスクの飾り文字)

小岩井農場

小岩井農場

パート一

わたくしはずるぶんすばやく汽車からおりた
そのために雲がぎらつとひかつたくらるだ
けれどももつとはやいひとはある
化学の並川さんによく肖にたひとだ
あのオリブのせびろなどは
そつくりをとなし農學士だ

さつき盛岡のていしやばでも
たしかにわたくしはさうおもつてゐた
このひとが砂糖水のなかの
つめたくあかるい待合室から
ひとあしでるとき……わたくしもてる
馬車がいちだいたつてゐる
馭者がひとことなにかいふ
黒塗りのすてきな馬車だ
光澤消しだ
馬も上等のハックニー
このひとはかすかにうなづき
それからじぶんといふ小さな荷物を

載つけるといふ氣軽なふうで
馬車にのぼつてこしかける
(わづかの光の交錯だ)
その陽のあたつたせなか
すこし屈んでしんとしてゐる
わたくしはあるいて馬と並ぶ
これはあるひは客馬車だ
どうも農場のらしくない
わたくしにも乗れといへばいい
馭者がよこから呼べばいい
乗らなかつたつていゝのだが
これから五里もあるくのだし

くらかけ山の下あたりで
 ゆつくり時間もほしいのだ
 あすこなら空気もひどく明瞭で
 樹でも艸でもみんな幻燈だ
 もちろんおきなくさも咲いてゐるし
 野はらは黒ぶだう酒しゅのコツブもならべて
 わたくしを歎待するだらう
 そこでゆつくりとどまるために
 本部までも乗つた方がいい
 今日ならわたくしだつて
 馬車に乗れないわけではない
 (あいまいな思惟の螢光)

きつといつてもかうなのだ
 もう馬車がうごいてゐる
 (これがじつにいゝことだ
 どうしやうか考へてゐるひまに
 それが過ぎて滅なくなるといふこと)
 ひらつとわたくしを通り越す
 みちはまつ黒の腐植土で
 雨あまあがりだし弾力もある
 馬はピンと耳を立て
 その端はしは向ふの青い光に尖り
 いかにもきさくに馳けて行く
 うしろからはもうたれも來ないのか

つつましく肩をすぼめた停車場と
 新聞地風の飲食店
 ガラス障子はありふれててこぼこ
 わらじやsun-matのから函や
 夏みかんのあかるいにほひ
 汽車からおりたひとたちは
 さつきたくさんあつたのだが
 みんな丘かげの茶褐部落や
 繫あたりへ往くらしい
 西にまがつて見えなくなつた
 いまわたくしは歩測のときのやう
 しんかい地ふうのたてものは

みんなうしろに片附けた
 そしてこここそ畑になつてゐる
 黒馬が二ひき汗でぬれ
 犁をひいて住つたりきたりする
 ひわいろのやはらかな山のこつちがはだ
 山ではふしぎに風がふいてゐる
 嫩葉がさまざまにひるがへる
 ずうつと遠くのくらいところでは
 鶯もごろごろ啼いてゐる
 その透明な群青のうぐひすが

(ほんたうの鶯の方はドイツ讀本の
 ハンスがうぐひすでないよと云つた)

馬車はずんずん遠くなる
 大きくゆれるしはねあがる
 紳士もかろくはねあがる
 このひとはもうよほど世間をわたり
 いまは青ぐるいふちのやうなところへ
 すましてこしかけてゐるひとなのだ
 そしてずんずん遠くなる
 はたけの馬は二ひき
 ひとはふたりで赤い
 雲に瀟された日光のために
 いよいよあかく灼けてゐる
 冬にきたときはまるてべつだ

みんなすつかり變つてゐる
 變つたとはいへそれは雪が往き
 雲が展けてつちが呼吸し
 幹や芽のなかに燐光や樹液がながれ
 あをじろい春になつただけだ
 それよりもこなせわしい心象の明滅をつらね
 すみやかなすみやかな萬法流轉のなかに
 小岩井のきれいな野はらや牧場の標本が
 いかにも確かに織起するといふことが
 どんなに新鮮な奇蹟だらう
 ほんたうにこのみちをこの前行くときは
 空氣がひどく稠密で

つめたくそしてあかる過ぎた
今日は七つ森はいちめんの枯草^{かれくさ}
松木がおかしな緑褐に
丘のうしろとふもとに生えて
大へん陰鬱にふるびて見える

パート二

たむぼりんも遠くのそらで鳴つてるし
雨はけふはだいいじやうぶふらない
しかし馬車もはやいと云つたところて

そんなにすてきなわけではない
いままでたつてやつとあすこまで
ここからあすこまでのこのまつすくな
火山灰のみちの分だけ行つたのだ
あすこはちやうどまがり目で
すがれの草穂^はもゆれてゐる

(山は青い雲でいつばい 光つてゐるし

かけて行く馬車はくろくてりつばだ)

ひばり ひばり

銀の微塵^{ひび}のちらばるそらへ
たつたいまのぼつたひばりなのだ
くろくてすばやくききいろだ

そらでやる Brownian movement

おまけにあいつの翅はねときたら

甲蟲のやうに四まいある

飴アメいろのやつと硬い漆ぬりの方と

たしかに二重たへにもつてゐる

よほど上手に鳴いてゐる

そらのひかりを呑みこんでゐる

光波のために溺れてゐる

もちろんずつと遠くては

もつとたくさんないてゐる

そいつのほうははいけいだ

向ふからはこつちのやつがひどく勇敢に見える

うしろから五月のいまごろ

黒いながいオーヴァを着た

醫者らしいものがやつてくる

たびたびこつちをみてゐるやうだ

それは一本みちを行くときに

ごくありふれたことなのだ

冬にもやつぱりこんなあんばいに

くろいイムバネスがやつてきて

本部へはこれでいいんてすかと

遠くからことばの浮標ウキヒラをなげつけた

でこぼこのゆきみちを

辛うじて咀嚼シヤクするといふ風にあるさながら

本部へはこれていゝんですかと
心細こころほそさうにきいたのだ
おれはぶつさら棒にああと
言つただけなので
ちやうどそれだけ大たいへんか
あいさうな気がした
けふのはもつと遠くからくる

パート三

もう入口だ〔小岩井農場〕
混こんだ野ばらやあけびのやび
(いつものとほりだ)

〔もの賣りさのことりと断り申し候〕
(いつものとほりだ ぢき醫院もある)
〔禁獵區〕 ふん いつものとほりだ。
小さな澤と青い木こだち
澤では水が暗くそして鈍にぶつてゐる
また鐵てつゼルの fluorescence
向ふの畑はたけには白樺もある
白樺は好摩こうまからむかふですと
いつかおれは羽田縣屈に言つてゐた
ことはよつほど高いから
柳澤つづきの一帯だ
やつぱり好摩にあたるのだ

どうしたのだこの鳥の聲は
 なんとといふたくさん鳥だ
 鳥の小學校にきたやうだ
 雨のやうだし湧いてるやうだ
 居る居る鳥がいつぱいにゐる
 なんとといふ数だ 鳴く鳴く鳴く

Rondo Capriccioso

ぎゆつくぎゆつくぎゆつくぎゆつく
 あの木のしんにも一びさゐる
 禁獵區のためだ 飛びあがる

(禁獵區のためでない ぎゆつくぎゆつく)
 一びきてない ひとむれだ

十疋以上だ 弧をつくる
 (ぎゆつく ぎゆつく)
 三またの槍の穂 弧をつくる
 青びかり青びかり赤楊はんの木立
 のぼせるくらゐだこの鳥の聲

(その音がぼつとひくくなる
 うしろになつてしまつたのだ
 あるひはちゆういのりずむのため
 両方ともだ とりのこゑ)

木立がいつか並樹になつた
 この設計は飾繪かざりゑ式だ
 けれども偶然だからしかたない

荷馬車がなしか三臺とまつてゐる
 生な松の丸太がいつぱいにつまれ
 陽がいつかこつそりおりてきて
 あたらしいテレピン油の蒸氣壓
 一臺だけがあるいてゐる。
 けれどもこれは樹や枝のかけてなくて
 しめつた黒い腐植質と
 石竹いろの花のかけら
 さくらの並樹になつたのだ
 こんなしづかなめまぐるしさ。

この荷馬車にはひとがついてゐない

馬は拂ひ下げの立派なハックニー
 脚のゆるるのは年老つたため

(おい　ヘングスト　しつかりしろよ)

三日月みたいな眼つきをして

おまけになみだがいつぱいで

陰氣にあたまを下げてゐられると

おれはまつたくたまらないのだ

威勢よく桃いろの舌をかみふつと鼻を鳴らせ)

ぜんたい馬の眼のなかには複雑なレンズがあつて

けしきやみんなへんにうるんでいびつにみえる……

……馬車挽きはみんなといつしよに

向ふのごてのかれ草に

腰をおろしてやすんでゐる
 三人赤くわらつてこつちをみ
 また一人は大股にどてのなかをあるき
 なにか忘れものでももつてくるといふ風（蜂函の白ペンキ）
 櫻の木には天狗巢病（てんぐすぢびやう）がたくさんある
 天狗巢はやくも青い葉をだし
 馬車のラツバがきこえてくれば
 ここが一ぺんにスキツルになる
 遠くでは鷹がそらを截つてゐるし
 からまつ（からまつ）の芽はネクタイピンにほしくらゐだし
 いま向ふの並樹をくらつと青く走つて行つたのは
 （騎手はわらひ）赤銅（しやくどう）の人馬（じんば）の徽章だ

パート四

本部の氣取つた建物が
 櫻やポブラのこつちに立ち
 そのさびしい観測臺のうへに
 ロビンソン風力計の小さな椀や
 ぐらぐらゆれる風信器を
 わたくしはもう見出さない
 さつきの光澤消しの立派の馬車は
 いまごろどこかで忘れたやうにとまつてやうし。
 五月の黒いオートヴァコートも

どの建物かにまがつて行つた
冬にはこゝの凍つた池で
こどもらがひどくわらつた

(から松はとびいろのすてきな脚です)

向ふにひかるのは雲でせうか粉雪でせうか

それとも野はらの雪に目が照つてゐるのでせうか

氷滑りをやりながらなにがそんなにおかしいのです

おまへさんたちの頬つべたはまつ赤ですよ)

葱いろの春の水に

楊ペムベロの花芽ももうぼやける……

はたけは茶いろに堀りおこされ

廐肥も四角につみあげてある

並樹ざくらの天狗巢には

いぢらしい小さな緑の旗を出すのもあり

遠くの縮れた雲にかかるのでは

みづみづした鶯いろの弱いのもある……

あんまりひばりが啼きすぎる

(青馬部と本部とのあひだでさへ

ひばりやなんか一ダースできかない)

そのキルギス式の逞ましい耕地の線が

ぐらぐらの雲にうかぶこちら

みぢかい素朴な電話ばしらが

右にまがり左へ傾きひどく乱れて

まがりかどには一本の青木

(白樺だらう 楊ではない)
 耕耘部へはここから行くのがちかい
 ふゆのあひだだつて雪がかたまり
 馬はまも通つていつたほどだ

(ゆきがかたくはなかつたやうだ
 なぜならそりはゆきをあげた
 たしかに酵母のちんでんを
 冴えた氣流に吹きあげた)

あのときはさらさらする雪の移動のなかを
 ひとはあぶなつかしいセレナーデを口笛に吹き
 往つたりきたりなんべんしたかわからない

(四列の茶いろな落葉松)

けれどもあの調子はづれのセレナーデが
 風やときどきばつとたつ雪と
 どんなによくつりあつてゐたことか
 それは雪の目のアイスクリームとおなし

(もつともそれなら暖爐だんろもまつ赤かだらうし
 museobite も少しそつぽに灼やけるだらうし

おれたちには見られないぜい澤たくだ)

春のヴァンダイクブラウン
 きれいにはたけは耕耘された
 雲はけふも白金ぎんと白金ぎん黒くろ
 そのまばゆい明暗めいあんのなかで
 ひぼりはしきりに啼ないてゐる

(雲の讃歌と日の軋り)

それから眼をまたあげるなら
 灰いろなもの走るもの蛇に似たもの 雉子だ
 亜鉛鍍金の雉子なのだ
 あんまり長い尾をひいてうららかに過ぎれば
 もう一疋が飛びおちる
 山鳥ではない

(山鳥ですか? 山で? 夏に?)

あるくのははやい 流れてゐる
 オレンジいろの日光のなかを
 雉子はするするながれてゐる
 啼いてゐる

それが雉子の聲だ
 いま見はらかす耕地のはづれ
 向ふの青草の高みに四五本乱れて
 なんとといふ氣まぐれなさくらだらう
 みんなさくらの幽霊だ
 内面はしだれやなぎで
 鶉いろの花をつけてゐる

(空でひとむらの海綿白金がちぎれる)

それらかゞやく氷片の懸吊をふみ
 青らむ天のうつろのなかへ
 かたなのやうにつきすすみ
 すべて水いろの哀愁を焚き

さびしい反照の偏光を截れ
 いま日を横ぎる黒雲は
 侏羅や白堊のまつくらな森林のなか
 爬虫がけはしく齒を鳴らして飛ぶ
 その氾濫の水けむりからのぼったのだ
 たれも見てゐないその地質時代の林の底を
 水は濁つてどんだんながれた
 いまこそおれはさびしくない
 たつたひとり生きて行く
 こんなさまなたましひと
 たれがいつしよに行けやうか
 大びらにまつすぐに進んで

それでいけないといふのなら
 田舎ふうのダブルカラなど引き裂いてしまへ
 それからさががあんまり青黒くなつてきたら……
 そんなさきまでかんがへないでいい
 ちからいつばい口笛を吹け
 口笛をふけ 陽の錯綜
 たよりもない光波のふるひ
 すきとほるものが一列わたくしのあとからくる
 ひかりかすれ またうたふやうに小さな胸を張り
 またほのぼのとかがやいてわらふ
 みんなすあしのこどもらだ
 ちらちら瓔珞もゆれてゐるし

めいめい遠くのうたのひとくさりづつ
 緑金寂靜ろくきんじやくじやうのほのほをたもち
 これらはあるひは天の鼓手こしゅ、緊那羅きんならのこどもら

(五本の透明なさくらの木は

青々とかげらふをあげる)

わたくしは白い雜囊をぶらぶらさげて

きままな林務官のやうに

五月のきんいろの外光のなかで

口笛をふき歩調をふんでわるいだらうか

たのしい太陽系の呑だ

みんなはしつたりうたつたり

はねあがつたりするがいい

(コロナは八十三萬二百……)

あの四月の實習のはじめの日

液肥をはこぶいちにちいつばい

光炎菩薩太陽マヂツクの歌が鳴つた

(コロナは八十三萬四百……)

ああ陽光のマヂツクよ

ひとつのせきをこえるとき

ひとりがかつぎ棒をわたせば

それは太陽のマヂツクにより

磁石のやうにもひこりの手に吸ひついた

(コロナは七十七萬五千……)

どのこどもかが笛を吹いてゐる

それはわたくしにきこえない
けれどもたしかにふいてゐる

(ぜんたい笛といふものは

さまぐれなひよるひよるの會長だ)

みちがぐんぐんうしろから湧き

過ぎて来た方へたたんで行く

むら氣な四本の櫻も

記憶のやうにとほざかる

たのしい地球の氣圏の春だ

みんなうたつたりはしつたり

はねあがつたりするがいい

(パート五) (パート六)

パート七

とびいろのはたけがゆるやかに傾斜して

すきとほる雨のつぶに洗はれてゐる

そのふもとに白い笠の農夫が立ち

つくづくとそらのくもを見あげ

こんごはゆつくりあるきだす

(まるで行きつかれたたび人だ)

汽車の時間をたづねてみやう
こゝはぐちやぐちやした青い湿地で
もうせんだげも生えてゐる

(そのうすあかい毛もちぢれてゐるし

どこかのがまの生えた沼地を

ネー將軍麾下の騎兵の馬が

泥に一尺ぐらゐ踏みこんで

すばすば涉つて進軍もした)

雲は白いし農夫はわたしをまつてゐる

またあるきだす(縮れてぎらぎらの雲)

トツパースの雨の高みから

けらを着た女の子がふたりくる

シベリヤ風に赤いきれをかぶり

まつすぐにいそでやつてくる

(Miss Robin) 働きにきてゐるのだ

農夫は富士見の飛脚のやうに

笠をかしげて立つて待ち

白い手甲さへはめてゐる、もう二十米だから

しばらくあるきださないでくれ

じぶんだけせつかく待つてゐても

用がなくてはこまるとおもつて

あんなにぐらぐらゆれるのだ

(青い草穂は去年のだ)

あんなにぐらぐらゆれるのだ

さわやかだし顔も見えるから

ここからはなしかけていゝ

シャツポをこれ (黒い羅紗もぬれ)

このひとはもう五十ぐらゐだ

(ちよつとお訊ぎ申しあんす)

盛岡行き汽車なん時だべす)

(三時だたべが)

すゐぶん悲しい顔のひとだ

博物館の能面にも出てゐるし

どこかに鷹のきもちもある

うしろのつめたく白い空では

ほんたうの鷹がぶうぶう風を截る

雨をおとすその雲母摺りの雲の下

はたけに置かれた二臺のくるま

このひとはもう行かうとする

白い種子は燕麥なのだ

(燕麥播ぎすか)

(あんいま向てやつてら)

この爺さんはなにか向ふを畏れてゐる

ひじやうに恐ろしくひどいことが

そつちにあるとおもつてゐる

そこには馬のつかない厩肥車と

けわしく翔ける鼠いろの雲ばかり

こはがつてゐるのは

やつぱりあの蒼鉛さうえんの労働なのか

(こやし入れだのすか)

堆肥たいひと過燐酸かりんさんとすか)

(あんさうす)

(ずるぶん氣持のいゝ處ところだもな)

(ふう)

この人はわたくしとはなすのを

なにか大へんはばかつゐる

それはふたつのくるまのよこ

はたけのおはりの天未線スカイライン

ぐらぐらの空のこつち側を

すこし猫背ねこぜでせいの高い

くろい外套の男が

雨雲に銃を構へて立つてゐる

あの男がどこか氣がへんで

急に鐵砲をこつちへ向けるのか

あるひは Miss Robin たちのことか

それとも兩方いつしなのか

どつちも心配しないでくれ

わたしはどつちもこわくない

やつてるやつてるそらで鳥が

(あの鳥何て云ふす 此處こゝらで)

(ぶどしぎ)

(ぶどしぎで云ふのか)

(あん 曇るづどよく出はら)

から松の芽の緑玉髓

かけて行く雲のこつちの射手は
またもつたいらしく銃を構へる

(三時の次あ何時だべす)

(五時だべが ゆぐ知らない)

過磷酸石灰のヅツク袋

水溶十九と書いてある

学校のは十五%だ

雨はふるしわたくしの黄いろな仕事着もぬれる
遠くのそらではそのぼとしぎどもが
大きく口をあいてビール瓶のやうに鳴り

灰いろの咽喉の粘膜に風をあて
めざましく雨を飛んでゐる

少しばかり青いつめくさの交つた

かれくさと雨の雫の上には

菩提樹皮の厚いけらをかぶつて

さつきの娘たちがねむつてゐる

爺さんはもう向ふへ行き

射手は肩を怒らして銃を構へる

(ぼとしぎのつめたい發動機は……)

ぼとしぎはぶうぶう鳴り

いつたいなにを射たうといふのだ

爺さんの行つた方から

わかい農夫がやつてくる
 かほが赤くて新鮮にふとり
 セシルローズ型の圓い肩をかじめ
 燐酸のあき袋をあつめてくる
 二つはちやんと肩に着てゐる

(降つてげだごとなさ)

(なあにすぐ霽れらんす)

火をたいてゐる

赤い燐もちらちらみえる

農夫も戻るしわたくしもついて行かう
 これらのからまつの小さな芽をあつめ
 わたくしの童話をかざりたい

ひとりのむすめがきれいにわらつて起きあがる
 みんなはあかるい雨の中ですうすうねむる

(うな いいおなごだもな)

にはかにそんなに大聲にどなり

まつ赤になつて石臼のやうに笑ふのは

このひとは案外にわかいのだ

すきとほつて火が燃えてるる

青い炭素のけむりも立つ

わたくしもすこしあたりたい

(おらも中つてもいがべが)

(いてす さあおあたりやんせ)

(汽車三時すか)

(三時四十分)

まだ一時にもならないも

火は雨でかへつて燃える

自由射手は銀のそら

ぼとしぎどもは鳴らす鳴らす

すつかりぬれた 寒い がたがたする

パート九

198

すきとほつてゆれてゐるのは

さつきの剽悍な四本のさくら

107

わたくしはそれを知つてゐるけれども

眼にははつきり見てゐない

たしかにわたくしの感官の外で

つめたい雨がそそいでゐる

(天の微光にさだめなく

うかべる石をわがふめば

あゝユリア しづくはいとど降りまさり

カシオペーアはめぐり行く)

ユリアがわたくしの左に行く

大きな細いろの瞳をりんと張つて

ユリアがわたくしの左に行く

ペムベルがわたくしの右にゐる

.....はさつき横へ外れた

あのから松の列のところから横へ外れた

〔幻想が向ふから迫つてくるときは

もうにんげんの壊れるときだ〕

わたくしははつきり眼をあいてあるいてゐるのだ

ユリア、ペムベル、わたくしの遠いともだちよ

わたくしはずゐぶんしばらくぶりて

きみたちの巨きなまつ白なすあしを見た

どんなにわたくしはきみたちの昔の足あとを

白聖系の頁岩の古い海岸にもとめただらう

〔あんまりひどい幻想だ〕

わたくしはなにをびくびくしてゐるのだ

どうしてもどうしてもさびしくてたまらないときは

ひとはみんなきつと斯ういふことになる

きみたちとけふあふことができたので

わたくしはこの巨きな旅のなかの一つづりから

血みどろになつて逃げなくてもいいのです

(ひばりが居るやうな居ないやうな

腐植質から麥が生え

雨はしきりに降つてゐる)

さうです、農場のこのへんは

まつたく不思議におもはれます

どうしてかわたくしはここらを

der heilige Punkt へ

呼びたいやうな気がします
 この冬だつて耕耘部まで用事で来て
 こゝいらの匂のいゝふぶきのなかで
 なにとはなしに聖いころもちがして
 凍えさうになりながらいつまでもいつまでも
 いつたり來たりしてゐました
 さつきもさうです

どこの子どもらですかあの瓔珞をつけた子は

（そんなことでだまされてはいけない

ちがつた空間にはいろいろちがつたものがゐる
 それにだいいちさつきからの考へやうが
 まるで銅版のやうなのに氣がつかないか）

雨のなかでひばりが鳴いてゐるのです

あなたがたは赤い瑪瑙の棘でいつばいな野はらも

その貝殻のやうに白くひかり

底の平らな巨きなすあしにふむのでせう

もう決定した そつちへ行くな

これらはみんなただしくない

いま疲れてかたちを更へたおまへの信仰から

發散して酸えたひかりの澱だ

ちいさな自分を割ることのできない

この不可思議な大きな心象宇宙のなかで

もしも正しいねがひに燃えて

じぶんとひとと萬象といつしよに

至上福しにいたらうとする
 それをある宗教情操とするならば
 そのねがひから碎けまたは疲れ
 じぶんとそれからたつたもひとつのたましひと
 完全そして永久にどこまでもいつしよに行かうとする
 この變態を戀愛といふ
 そしてどこまでもその方向では
 決して求め得られないその戀愛の本質的な部分を
 むりにもごまかし求め得やうとする
 この傾向を性慾といふ
 すべてこれら漸移のなかのさまざまな過程に従つて
 さまざまな眼に見えまた見えない生物の種類がある

この命題は可逆的にもまた正しく
 わたくしにはあんまり恐ろしいことだ
 けれどもいくら恐ろしいといつても
 それがほんたうならしかたない
 さあはつきり眼をあいてたれにも見え
 明確に物理学の法則にしたがふ
 これら實在の現象のなかから
 あたらしくまつすぐに起て
 明るい雨がこんなにたのしくそそぐのに
 馬車が行く 馬はぬれて黒い
 ひとはくるまに立つて行く
 もうけつしてさびしくはない

なんべんさびしくないと云つたところで
またさびしくなるのはきまつてゐる
けれどもここはこれでいいのだ
すべてさびしさと悲傷とを焚いて
ひとは透明な軌道をすすむ
ラリックス ラリックス いよいよ青く
雲はますます縮れてひかり
わたくしはかつきりみちをまがる

グ
ラ
ン
ド
電
柱

林ご思想

そら、ね、ごらん
むかふに霧にぬれてゐる
葎きごのかたちのちいちな林があるだらう
あすこのとこへ
わたしのかんがへが
ずるぶんはやく流れて行つて
みんな
溶け込んでゐるのだよ
こゝいらはふきの花でいつばいだ

霧とマツチ

(まちはづれのひのきと青いポプラ)
霧のなかからにはかにかく燃えたのは
しゆつと擦られたマツチだけれども
ずるぶん擴大されてゐる
スキヂツシ安全マツチだけれども
よほど酸素が多いのだ
(明方の霧のなかの電燈は
まめいろで匂もいゝし
小學校長をたかぶつて散歩することは

118

119

芝生

風とひのきのひるすぎに
小田中はのびあがり
あらんかぎり手をのばし
灰いろのゴムのまり、光の標本を
受けかねてぼろつとおとす

青い槍の葉

(mentalsketchmodified)

120

(ゆれるゆれるやなぎはゆれる)
雲は來るくる南の地平
そらのエレキを寄せてくる
鳥はなく啼く青木のほづえ
くもにやなぎのかくこどり
(ゆれるゆれるやなぎはゆれる)
雲がちぎれて日ざしが降れば

121

黄金の幻燈 草の青
氣圈日本のひるまの底の
泥にならべるくさの列
(ゆれるゆれるやなぎはゆれる)
雲はくるくる日は銀の盤
エレキづくりのかはやなぎ
風が通ればさえ冴え鳴らし
馬もはねれば黒びかり
(ゆれるゆれるやなぎはゆれる)
雲がされたかまた日がそそぐ
土のスーブと草の列
黒くおどりはひるまの燈籠

泥のコロイド、その底に

(ゆれるゆれるやなぎはゆれる)

りんと立て立て青い槍の葉

たれを刺さうの槍ぢやなし

ひかりの底でいちにち日がな

泥にならべるくさの列

(ゆれるゆれるやなぎはゆれる)

雲がちぎれてまた夜があけて

そらは黄水晶^{シトリン}ひでりあめ

風に霧ふくぶりきのやなぎ

くもにしらしらそのやなぎ

(ゆれるゆれるやなぎはゆれる)

りんと立て立て青い槍の葉

そらはエレキのしろい網

かげとひかりの六月の底

氣圈日本の青野原

(ゆれるゆれるやなぎはゆれる)

報 告

さつき火事だとさわぎましたのは虹でございました
もう一時間もつづいてりんと張つて居ります

風景観察官

あの林は
あんまり縁青を盛り過ぎたのだ
それでも自然ならしかたないが
また多少ブルキインの現象にもよるやうだが
も少しそこから橙黄線を送つてもらふやうにしたら
どうだらう

ああ何といふいい精神だ
株式取引所や議事堂でばかり

フロックコートは着られるものでない
むしろこんな黄水晶の夕方に
まつ青な稲の槍の間で
ホルスタインの群を指導するとき
よく適合し効果もある
何といふいい精神だらう
たごへそれが羊羹いろでぼろぼろで
あるひはすこし暑くもあらうが
あんなまじめな直立や
風景のなかの敬虔な人間を
わたくしはいままで見たことがない

そらの散亂反射のなかに
古ぼけて黒くえぐるもの
ひかりの微塵系列の底に
きたなくしろく澱むもの

岩手山

高原

海だべがど、おら、おもたれば
やつぱり光る山だたぢやい
ホウ
髪の毛 風吹けば
鹿踊りだぢやい

印象

ラリツクスの青いのは
木の新鮮と神経の性質と両方からくる

そのとき展望車の藍いろの紳士は
X型のかけがねのついた帯革をしめ
すきとほつてまつすぐになち
病氣のやうな顔をして
ひかりの山を見てゐたのだ

高級の霧

128

こいつはもう
あんまり明るい高級の霧です

129

白樺も芽をふき
からすむぎも
農舎の屋根も
馬もなにかも
光りすぎてまぶしくて

（まぶし過ぎる）
目射しのなかの青と金
落葉松は

たしかとどまつに似て居ります）
まぶし過ぎて
空氣さへすこし痛いくらゐるです

電車

トンネルへはいるのでつけた電燈ぢやないのです
車掌がぼんのおもしろまぎれにつけたのです
こんな豆ばたけの風のなかで

なあに、山火事でござんせう
なあに、山火事でござんせう
あんまり大きござんすから
はてな、向ふの光るあれは雲ですな
木きつてゐますな

いとえ、やつぱり山火事でござんせう

おら、きさま

日本の萱の野原をゆくビクトルカランザの配下
帽子が風にとられるぞ

こんどは青い稗ひえを行く貧弱カランザの末輩
きさまの馬はもう汗でぬれてゐる

天然誘接

北齊のはんのきの下で
 黄の風車まはるまはる
 いつぼんすぎは天然誘接ではありませぬ
 槻と杉とがいつしよに生えていつしよに育ち
 たうたう幹がくつついて
 険しい天光に立つといふだけです
 鳥も棲んではゐますけれど

原體劍舞連

(mental sketch modified)

dah-dah-dah-dah-dah-dah-sko-dah-dah

こんや異装のげん月のした
 鶏の黒尾を頭巾にかざり
 片刃の太刀をひらめかす
 原体村の舞手たちよ
 鶴いろのはるの樹液を
 アルペン農の辛酸に投げ
 生しののめの草いろの火を
 高原の風とひかりにさしげ
 菩提樹皮と繩とをまごふ
 氣圏の戦士わが朋たちよ
 青らみわたる影氣をふかみ

檜と掬とのうれひをあつめ
 蛇紋山地に箒をかかけ
 ひのきの髪をうちゆすり
 まるめろの匂のそらに
 あたらしい星雲を燃せ

dah-dah-sko-dah-dah

肌膚を腐植と土にけづらせ
 筋骨はつめたい炭酸に粗び
 月月つきづきに日光と風とを焦慮し
 敬虔に年を累ねた師父たちよ
 こんや銀河と森とのまつり
 准平原じゅんぺいげんの天末線てんまつせんに

さらに強く鼓を鳴らし
 うす月の雲をどよませ

Hoi Hoi Hoi

ひかし達谷たちたの悪路王あくろおう
 まつくらくらの二里の洞ほら
 わたるは夢と黑夜神こくやじん
 首は刻まれ漬けられ
 アンドロメダもかゞりにゆすれ
 青い假面めんこのこけおごし
 大刀を浴びてはいつぶかぶ
 夜風の底の蜘蛛くまおどり
 胃袋はいてぎつたぎた

dah-dah-dah-dah-dah-sko-dah-dah

さらになだしく刃を合はせ
霹靂の青火をくだし
四方の夜の鬼神をまねき
樹液もふるふこの夜さひとよ
赤ひたたれを地にひるがへし
電雲と風とをまつれ

dah-dah-dah-dah

夜風とどろきひのきはみだれ
月は射そそぐ銀の矢並
打つも果てるも火花のいのち
太刀の軋りの消えぬひま

dah-dah-dah-dah-dah-sko-dah-dah

太刀は稻妻萱穂のさやぎ
獅子の屋座に散る火の雨の
消えてあとない天のがはら
打つも果てるもひこついのち

dah-dah-dah-dah-dah-sko-dah-dah

グラント電柱

あめと雲とが地面に垂れ
 すすきの赤い穂も洗はれ
 野原はすがすがしくなつたので
 花巻はなまきグランド電柱でんちゅうの
 百の碍子がしにあつまる雀

掠奪のために田にはいり
 うるうるうるうると飛び
 雲と雨とのひかりのなかを
 すばやく花巻はなまき大三叉路だいさんさろの
 百の碍子がしにもどる雀

山 巡 査

あお

何といふ立派な檜だ

緑の勳爵士ムンシャクシだ

雨にぬれてまつすぐに立つ緑の勳爵士ムンシャクシだ

栗の木ばやしの青いくらがりに

しぶきや雨にびしやびしや洗はれてゐる

その長いものは一体舟か

それともそりか
あんまりロシヤふうだよ

沼に生えるものはやなぎやサラダ
きれいな蘆あしのサラダだ

電線工夫

140

でんしんばしらの氣まぐれ碍子の修繕者
雲とあめとの下のあなたに忠告いたします

141

それではあんまりアラビアンナイト型です
からだをそんなに黒くかつきり鍵にまげ
外套の裾もぬれてあやしく垂れ
ひどく手先を動かすでもないその修繕は
あんまりアラビアンナイト型です
あいつは悪魔のためにあの上
つけられたのだと云はれたとき
どうあなたは辯解をするつもりです

た び 人

あめの稲田の中を行くもの
海坊主林うみぼうずはやしのはうへ急ぐもの
雲と山との陰氣のなかへ歩くもの
もつと合羽をしつかりしめる

竹
と
櫓

煩悶はんもんですか
煩悶はんもんならば
雨の降るとき

竹と櫓たけとらぶらとの林の中がいいのです
(おまへこそ髪を刈れ)
竹と櫓との青い林の中がいいのです

(おまへこそ髪を刈れ
そんな髪をしてゐるから
そんなことも考へるのだ)

銅
線

おい、銅線をつかつたな

どんぼのからだの銅線をつかひ出したな

はんのき、はんのき

交錯光亂轉

氣圈日本では

たうたう電線に銅をつかひ出した

(光るものは碍子

過ぎて行くものは赤い萱の穂)

瀧澤野

光波測定くわはそくていの誤差ごさから

から松のしんは徒長とちやうし

柏かしわの本の烏瓜からすうりランタン

(ひるの鳥は曠野に啼き

あざみは青い棘いばらに遷うつる)

太陽が梢えだに發射はつしやするとき

暗い林の入口いりぐちにひとりただずむものは

四角しかくな若い樺かやの木で

GreenDwarf といふ品種

日光のために燃え盡じんきさうになりながら

燃えきらず青くけむるその木

羽蟲うごもは一疋ひとづつ光り

鞍掛や銀の錯乱

(寛政十一年は百二十年前です)

そらの魚の涎またれはふりかかり

天未線スカイラインの恐ろしさ

東岩手火山

東岩手火山

月は水銀、後夜の喪主

火山礫は夜の沈澱

火口の巨きなえぐりを見ては

たれもみんな愕くはづだ

(風としづけさ)

いま漂着する薬師外輪山

頂上の石標もある

(月光は水銀、月光は水銀)

(こんなことはじつにまれです)

向ふの黒い山……つて、それですか
それはこのこのつづきです
このこのつづきの外輪山です
あすこのてつべんが絶頂です
向ふの？

向ふのは御室火口です

これから外輪山をめぐるのですけれども
いまはまだなんにも見えませんから
もすこし明るくなつてからにしませう
え、太陽が出なくても
あかるくなつて

西岩手火山のはらの火口湖やなにか

見えるやうにさへなればいいんです

お日さまはあすこらへんで拜みます)

黒い絶頂の右肩と

そのときのまつ赤な太陽

わたくしは見てゐる

あんまり真赤な幻想の太陽だ

(いまなん時です)

三時四十分？

ちやうど一時間

いや四十分ありますから

寒いひとは提灯でも持つて

この岩のかけに居てください)

ああ、暗い雲の海だ

《向ふの黒いのはたしかに早池蜂です

線になつて浮きあがつてるのは北上山地です

うしろ？

あれですか、

あれは雲です、柔らかさうですね、

雲が駒ヶ嶽に被さつたのです

水蒸氣を含んだ風が

駒ヶ嶽にぶつつかつて

上にあがり、

あんなに雲になつたのです。

鳥海山ちゅうかいさんは見えないやうです、

けれども

夜が明けたら見えるかもしれませぬよ

(柔かな雲の波だ)

あんな大きなうねりなら

月光會社の五千噸の汽船も

動搖を感じはしないだらう

その質は

蛋白石、class-wool

あるひは水酸化礬土の沈澱

《じつさいこんなことは稀なのです

わたくしはもう十何べんも來てゐますが

こんなにしづかで

そして暖かなことはなかつたのです

麓の谷の底よりも

さつきの九合の小屋よりも

却つて暖かなくらゐです

今夜のやうなしづかな晩は

つめたい空気が下へ沈んで

霜さへ降らせ

暖い空気は

上に浮んで来るのです

これが気温の逆轉です

御室火口の盛りあがりは

月のあかりに照らされてゐるのか

それともおれたちの提灯のあかりか

提灯だといふのは勿体ない

ひわいろで暗い

《それではもう四十分ばかり

寄り合つて待つておいてなさい

さうさう、北はこつちです

北斗七星は

いま山の下の方に落ちてゐますが

北斗星はあれです

それは小熊座といふ

あの七つの中なのです

それから向ふに

縦に三つならんだ星が見えませう
 下には斜めに房が下つたやうになり
 右と左とは
 赤と青と大きな星がありませう
 あれはオリオンです、オリオンです
 あの房の下のあたりに
 星雲があるといふのです
 いま見えません
 その下のは大夫のアルファ
 冬の晚いちばん光つて目立つやつです
 夏の蝸とうら表です
 さあみなさん、ご勝手におあるきなさい

向ふの白いのですか
 雪ぢやありません
 けれども行つてごらんなさい
 まだ一時間もありませんから
 私もスケッチをとります
 はてな、わたくしの帳面の
 書いた分がたつた三枚になつてゐる
 殊によると月光のいたづらだ
 藤原が提灯を見せてゐる
 ああ頁が折れ込んだのだ
 さあでは私はひとり行かう
 外輪山の自然な美しい歩道の上を

月の半分は赤銅、地球照

（お月さまには黒い處もある）

（後藤又兵衛いつつも拜んだづなす）

私のひとりごとの反響に

小田島治衛が云つてゐる

（山中鹿之助だらう）

もうかまはない、歩いていゝ

どつちにしてもそれは善いことだ

二十五日の月のあかりに照らされて

薬師火口の外輪山をあるくとき

わたくしは地球の華族である

蛋白石の雲は遙にたゝえ

オリオン、金牛、もろもろの星座

澄み切り澄みわたつて

瞬きさへもすくなく

わたくしの額の上にかがやき

さうだ、オリオンの右肩から

ほんたうに鋼青の壯麗が

ふるえて私にやつて来る

三つの提灯は夢の火口原の

白いところまで降りてゐる

（雪ですか、雪ぢやないでせう）

困つたやうに返事してゐるのは

雪でなく、仙人草のくさむらなのだ

さうでなければ高陵士カウリンゲル

残りの一つの提灯は

一升のところにとつてゐる

それはきつと河村慶助が

外套の袖にぼんやり手を引つ込めてゐる

〔御室みむろの方の火口へでもお入りなさい

噴火口へでも入つてごらんなさい

硫黄のつぶは拾へないでせうが〕

斯んなによく聲がとどくのは

メガホンもしかけてあるのだ

しばらく躊躇してゐるやうだ

〔先生 中なさ入はいつてもいいがべすか〕

〔えい、おはいりなさい 大丈夫です〕

提灯が三つ沈んでしまふ

そのでこぼこのまつ黒の線

すこしのかなしさ

けれどもこれはいつたいたいなんといふいゝことだ

大きな帽子をかぶり

ちぎれた朱子のマントを着て

薬師火口の外輪山の

しづかな月明を行くといふのは

この石標は

下向の道と書いてあるにさういない
 火口のなかから提灯が出て来た
 宮澤の聲もきこえる
 雲の海のはてはだんだん平らになる
 それは一つの雲平線うんびやうせんをつくるのだ
 雲平線をつくるのだといふのは
 月のひかりのひだりから
 みぎへすばやく擦過した
 一つの夜の幻覺だ
 いま火口原の中に
 一點しるく光ひかりるもの
 わたくしを呼んでゐる呼んでゐるのか

私は氣圈オペラの役者です
 鉛筆のさやは光り
 速かに指の黒い影はうごき
 唇を圓くして立つてゐる私は
 たしかに氣圈オペラの役者です
 また月光と火山塊のかけ
 向ふの黒い巨きな壁は
 熔岩か集塊岩、力彌い肩だ
 とにかく夜があけてお鉢廻りのときは
 あすこからこつちへ出て来るのだ
 なまぬるい風だ
 これが氣温の逆轉だ

(つかてゐるな、

わたしはやつぱり睡いのだ)

火山弾には黒い影

その妙好みょうこうの火口丘には

幾條かの軌道のあと

鳥の聲!

鳥の聲!

海拔六千八百尺の

月明をかける鳥の聲、

鳥はいよいよしつかりとなき

私はゆつくりと踏み

月はいま二つに見える

やつぱり疲れからの乱視なのだ

かすかに光る火山塊の一つの面

オリオンは幻怪げんかい

月のまはりは熟した瑪璃と葡萄

あくびと月光の動轉どうてん

(あんまりはねあるぐなぢやい

汝うなひとりだらいがべあ

子供等わらわらどもも連れてて目にあへば

汝うなひとりであすまないんだぢやい)

火口丘くわこうきゅうの上には天の川の小さな爆發

みんなのデカンショの聲も聞える

月のその銀の角のはじが
 潰れてすこし圓くなる
 天の海とオーバルの雲
 あたたかい空気は
 ふつと燃もになつて飛ばされて来る
 きつと屈折率も低く
 濃いしよたうやう蔗糖溶液に
 また水を加へたやうなのだらう
 東は淀み
 提灯ちやうちんはもとの火口の上に立つ
 また口笛を吹いてゐる
 わたくしも戻る

わたくしの影を見たのか提灯も戻る
 (その影は鐵いろの背景の
 ひとりの修羅に見える筈だ)
 さう考へたのは間違ひらしい
 とにかくあくびと影ばうし
 空のあの邊の星は微かな散點
 すなはち空の模様がちがつてゐる
 そして今度は月が蹙ちぢまる。

犬

なぜ吠えるのだ、二疋とも
吠えてこつちへかけてくる

(夜明けのひのきは心象のそら)

頭を下げることは犬の常套だ

尾をふることはこわくない

それなのに

なぜさう本氣にえるのだ

その薄明の二疋の犬

一匹きは灰色錫

一匹きの尾は茶の草穂

うしろへまはつてうなつてゐる

わたくしの歩きかたは不正でない

それは犬の中の狼のキメラがこわいのと

もひとつはさしつかえないため

犬は薄明に溶解する

うなりの尖端にはエレキもある

いつもあるくのになぜ吠えるのだ

ちやんと顔を見せてやれ

ちやんと顔を見せてやれと

誰かとならんであるきながら

犬が吠えたときに云ひたい

帽子があんまり大きくて
おまけに下を向いてあるいてきたので
吠え出したのだ

マサニエロ

城のすすきの波の上には
伊太利亞製の空間がある
そこで鳥の群が踊る
白雲母しらうんものくもの幾きれ

(濠と橄欖かんらん天蠶てんさ絨、杉)

ぐみの木かそんなにひかつてゆするもの
七つの銀のすすきの穂
(お城の下の桐畑でも、ゆれてゐるゆれてゐる、桐が)
赤い蓼たぐの花もうごく
すゞめ すゞめ
ゆつくり杉に飛んで稲にはいる
そこはどての陰で氣流もないので
そんなにゆつくり飛べるのだ
(なんだか風と悲しさのために胸がつまる)
ひこの名前をなんべんも
風のなかで繰り返してさしつかえないか

(もうみんな鍬や縄をもち
崖をおりてきていゝころだ)
いまは鳥のないしづかなそらに
またからすが横からはいる
屋根は矩形で傾斜白くひかり
こどもがふたりかけて行く
羽織をかざしてかける日本の子供ら
こんどは茶いろの雀どもの拋物線
金屬製の桑のこつちを
もひとりこどもがゆつくり行く
蘆の穂は赤い赤い
(ロシヤだよ、チエホフだよ)

はこやなぎ しつかりゆれるゆれる
(ロシヤだよ ロシヤだよ)
鳥がもいちど飛びあがる
稀硫酸の中の亞鉛屑は鳥のむれ
お城の上のそらはこんどは支那のそら
鳥三疋杉をすべり
四疋になつて旋轉する

樺の向ふで日はけむる
 つめたい露でレールはすべる
 靴革の料理のためにレールはすべる
 朝のレールを栗鼠は横切る
 横切るとしてたちどまる
 尾は der Herbst

日はまつしろにけむりだし
 栗鼠は走りだす

水そばの苹果アップル緑と石竹ピシク
 たれか三角やまの草を刈つた
 ずるぶんうまくきれいに刈つた
 緑いろのサラアブレッド

日は白金をくすぼらし
 一れつ黒い杉の槍

その早池峰はちねと薬師岳うんくわんの雲環は
 古い壁書のきららから
 再生してきて浮きだしたのだ

色鉛筆がほしいつて
 ステッドラアのみぢかいペンか
 ステッドラアのならいいんだが
 來月にしてもらひたいな

まあああの上の雲との模様を見る
 よく熟してゐてうまいから

無
聲
慟
哭

永訣の朝

けふのうちに

とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ
みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ

(あめゆじゆとてちてけんじや)

うすあかくいつさう陰惨な雲から

みぞれはびちよびちよふつてくる

(あめゆじゆとてちてけんじや)

青い葎菜じゆんさいのもやらのついた

これらふたつのかけた陶椀に
 おまへがたべるあめゆきをどらうとして
 わたくしはまがつたてつぼうだまのやうに
 このくらいみぞれのなかに飛びだした

(あめゆじゆとてちてけんじや)

蒼鉛いろの暗い雲から

みぞれはびちよびちよ沈んでくる

ああとし子

死ぬといふいまごろになつて

わたくしをいつしやうあかるくするため

こんなさつぱりした雪のひとわんを

おまへはわたくしにたのんだのだ

ありがたうわたくしのけなげないもうとよ
 わたくしもまつすぐにすすんでいくから

(あめゆじゆとてちてけんじや)

はげしいはげしい熱やあえぎのあひだから

おまへはわたくしにたのんだのだ

銀河や太陽、氣圏などとよばれたせかいの

そらからおちた雪のさいごのひとわんを……

…ふたきれのみかげせきざいに

みぞれはさびしくたまつてゐる

わたくしはそのうへにあぶなくたち

雪と水とのまつしろな二相系をたもち

すきとほるつめたい雫にみちた

このつややかな松のえだから
 わたくしのやさしいもうとの
 さいごのたべものをもらつていかう
 わたしたちがいつしよにそだつてきたあひだ
 みなれたちやわんのこの藍のもやうにも
 もうけふおまへはわかれてしまふ

(Ora Orade Sutoru egumo)

ほんたうにけふおまへはわかれてしまふ
 あああのとざされた病室の
 くらいびやうぶやかやのなかに
 やさしくあをじろく燃えてゐる
 わたくしのけなげないもうとよ

この雪はどこをえらばうにも
 あんまりどこもまつしろなのだ
 あんなおそろしいみだれたそらから
 このうつくしい雪がきたのだ

(うまれてくるたて

こんどはこたにわりやのごとばかりで
 くるしまなあよにうまれてくる)

おまへがたべるこのふたわんのゆきに
 わたくしはいまここからいのる
 どうかこれが天上のアイスクリームになつて
 おまへとみんななどに聖い資糧をもたらすやうに
 わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ

松の針

さつきのみぞれをとつてきた
あのきれいな松のえだよ
おまへはまるでとびつくやうに
そのみどりの葉にあつい頬をあてる
そんな植物性の青い針のなかに
はげしく頬を刺させることは
むさぼるやうにさへすることは
どんなにわたくしたちをおどろかすことか

そんなにまでもおまへは林へ行きたかつたのだ
おまへがあんなにぬつに燃され
あせやいたみでもだえてゐるとき
わたくしは日のてるところでたのしくはたらいたり
ほかのひとのことをかんがへながら森をあるいてゐた
（ああいい さつぱりした
まるで林のながさ来たよだ）
鳥のやうに栗鼠リスのやうに
おまへは林をしたつてゐた
どんなにわたくしがうらやましかつたらう
ああけふのうちにとほくへさらうとするいもうとよ
ほんたうにおまへはひとりていかうとするか

わたくしにいつしよに行けとたのんでくれ
泣いてわたくしにさう言つてくれ

おまへの頬の けれども

なんといふけふのうつくしさよ

わたくしは緑のかやのうへにも

この新鮮な松のえだをおかう

いまに雫もおちるだらうし

そら

さわやかな

ターペンチン
terpentine の匂もするだらう

無聲慟哭

こんなにみんなにみまもられながら

おまへはまだここでくるしまなければならぬか

ああ巨きな信のちからからことさらにはなれ

また純粹やちいさな徳性のかずをうしなひ

わたくしが青ぐらい修羅をあるいてゐるとき

おまへはじぶんにさだめられたみちを

ひとりさびしく往かうとするか

信仰を一つにするたつたひとりのみちづれのわたくしが

あかるくつめたい精進じやうしんのみちからかなしくつかれてゐて

毒草や螢光菌のくらしい野原をただよふとき
おまへはひとりどこへ行かうとするのだ

(おら、おかないふうしてらべ)

何といふあきらめたやうな悲痛なわらひやうをしながら
またわたくしのどんなちいさな表情も
けつして見遁さないやうにしながら

おまへはけなげに母に訊くのだ

(うんにや ずるぶん立派だぢやい)

けふはほんとに立派だぢやい)

ほんたうにさうだ

髪だつていつさうくろいし

まるでこどもの苹果の頬だ

どうかきれいな頬をして

あたらしく天にうまれてくれ

(それでもからだくさえがべ?)

(うんにや いつかう)

ほんたうにそんなことはない

かへつてここはなつののはらの

ちいさな白い花の匂でいつぱいだから

ただわたくしはそれをいま言へないのだ

(わたくしは修羅をあるいてゐるのだから)

わたくしのかなしさうな眼をしてゐるのは

わたくしのふたつのこころをみつめてゐるためだ

ああそんなに

かなしく眼をそらしてはいけない

註

- ※あめゆきとつてきてください
- ※あたしはあたしてひとりいきます
- ※またひとにうまれてくるときは
 こんなじぶんのことばかりで
 くるしまないやうにうまれてきます
- ※ああい　さつぱりした
 まるではやしのなかにきたやうだ
- ※あたしこわいふうをしてるでせう

※それでもわるいにほひてせう

風林

(かしはのなかには鳥の巢がない)

あんまりがさがさ鳴るためだ

ここは艸があんまり粗あらく

とほいそらから空気をすひ

おもひきり倒れるにてきしない

そこに水いろによこたはり

一列生徒らがやすんでゐる

(かげはよると亜鉛とから合成される)

それをうしろに

わたくしはこの草にからだを投げる

月はいましだいに銀のアトムをうしなひ

かしははせなかをくろくかがめる

柳澤やなぎさわの杉はなつかしくコロイドよりも

ぼうずの沼森ぬまもりのむかふには

騎兵聯隊の灯も澱んでゐる

〔ああおらはあど死んでもい〕

〔おらも死んでもい〕

〔それはしよんぼりたつてゐる宮澤か

さうでなければ小田島國友

向ふの柏木立のうしろの闇が

さらさらつといま顫えたのは

Egmont Overture にちがひない

たれがそんなことを云つたかは

わたくしはむしろかんがへないでい〕

〔傳さん しゃつつ何枚、三枚着たの

せいの高くひとのいい佐藤傳四郎は

月光の反照のにぶいたそがれのなかに

しゃつのぼたんをはめながら

さつと口をまげてわらつてゐる

降つてくるものはよるの微塵や風のかけら

よこに鉛の針になつてながれるものは月光のにぶ

〔ほお おら……〕

言ひかけてなぜ堀田はやめるのか
おしまひの聲もさびしく反響してゐるし
さういふことはいへばいい

(言はないなら手帳へ書くのだ)

とし子とし子

野原へ来れば

また風の中に立てば

さつとおまへをおもひだす

おまへはその巨きな木星のうへに居るのか

鋼青壯麗のそらのむかふ

(ああけれどもそのどこかも知れない空間で

光の紐やオーケストラがほんたうにあるのか

……此處あひあながくて

一日のうちの何時だかもわがらないで……

ただひとときのおまへからの通信が

いつか汽車のなかでわたくしにとどいたただけだ

とし子 わたくしは高く呼んでみやうか

(手凍えだ)

(手凍えだ?)

俊夫 ゆぐ凍えるな

こないだもボダンおれさ掛けらせだぢやい)

俊夫 といふのはどつちだらう 川村だらうか

あの青ざめた喜劇の天才「植物醫師」の一役者

わたくしははね起きなければならぬ

(あゝ 俊夫てごつちの俊夫)

(川村)

やつぱりさうだ

月光は柏のむれをうきたたせ

かしははいちめんさらさらと鳴る

白い鳥

(みんなサラブレッドだ

あゝいふ馬 誰行つても押へるにいがべが)

(よつぽどなれたひとてないと)

古風なくらかけやまのした

おきなくさの冠毛がそよぎ

鮮かな青い樺の木のしたに

何匹かあつまる茶いろの馬

じつにすてきに光つてゐる

(日本繪卷のそらの群青や

天末の *tuqnois* はめぐらしくないが

あんな大きな心相の

光の環は風景の中にすくない)

二疋の大きな白い鳥が

鋭くかなくし啼きかはしながら

しめつた朝の日光を飛んでゐる

それはわたくしのいもうとだ

死んだわたくしのいもうとだ

兄が来たのであんなにかなしく啼いてゐる

(それは一應はまぢがひだけけれども)

まつたくまぢがひとは言はれない)

あんなにかなしく啼きながら

朝のひかりをとんでゐる

(あさの日光ではなくて

熟してつかれたひるすぎらしい)

けれどもそれも夜どほしあるいてきたための

バリーグな銀の錯覺なので

ちやんと今朝あひしげて融けた金の液体が

青い夢の北上山地からのぼつたのをわたくしは見た)

どうしてそれらの鳥は二羽

そんなにかなしくきこえるか

それはじぶんはすくふちからをうしなつたとき

わたくしのいもうとをもうしなつた

そのかなしみによるのだが

(ゆふべは柏ばやしの月あかりのなか

けさはすずらんの花のむらがりななかで

なんべんわたくしはその名を呼び

またたれともわからない聲が

人のない野原のはてからこたへてきて

わたくしを嘲笑したとか)

そのかなしみによるのだが
 またほんたうにあの聲もかなしいのだ
 いま鳥は二羽、かゞやいて白くひるがへり
 むかふの湿地、青い芦のなかに降りる
 降りやうとしてまたのぼる

(日本武尊の新らしい御陵の前に

おきさきたちがうちふして嘆き
 そこからたまたま千鳥が飛べば
 それを尊のみたまとおもひ
 芦に足をも傷つけながら
 海べをしたつて行かれたのだ)

清原がわらつて立つてゐる

(日に灼けて光つてゐるほんたうの農村のこども

その菩薩ふうのあたまの容かたちはガンダラからから来た)
 水が光る　きれいな銀の水だ

(さああすこに水があるよ
 口をすゝいでさつぱりして往かう
 こんなきれいな野はらだから)

オ
ホ
ー
ツ
ク
挽
歌

青森挽歌

こんなやみよのはらのなかをゆくときは
客車のまどはみんな水族館の窓になる

(乾いたでんしんばしらの列が

せはしく遷つてゐるらしい

きしやは銀河系の玲瓏れいろうレンズ

巨きな水素のりんごのなかをかけてゐる)

りんごのなかをはしつてゐる

けれどもここはいつたいどここの停車場ばた

枕木を焼いてこさえた柵が立ち

(八月のよるのしづまの

寒天凝膠)

支手のあるいちれつの柱は

なつかしい陰影だけできてゐる

黄いろなラムプがふたつ點き

せいたかくあほじろい驛長の

眞鍮棒もみえなければ

じつは驛長のかげもないのだ

(その大學の昆蟲學の助手は

こんな車室いつぱいの液体のなかで

油のない赤髪をもちやもちやして

かばんにもたれて睡つてゐる)

わたくしの汽車は北へ走つてゐるはづなのに

ここではみなみへかけてゐる

焼杭の柵はあちこち倒れ

はるかに黄いろの地平線

それはピアアの澱をよどませ

あやしいよるの陽炎と

さびしい心意の明滅にまぎれ

水いろ川の水いろ驛

(おそろしいあの水いろの空虚なのだ)

汽車の逆行は希求の同時な相反性

こんなさびしい幻想から

わたくしははやく浮びあがらなければならぬ

そこらは青い孔雀のはねでいつぱい

真鍮の睡さうな脂肪酸にみち

車室の五つの電燈は

いよいよつめたく液化され

(考へださなければならぬことを

わたくしはいたみやつかれから

なるべくおもひださうとしない)

今日のひるすぎなら

けはしく光る雲のしたで

まつたくおれたちはあの重い赤いポムプを

ばかのやうに引つぱつたりついたりした

おれはその黄いろな服を着た隊長だ

だから睡いのはしかたない

(お、おまへ、せわしいみちづれよ)

どうかここから急いで去らないでくれ

〔尋常一年生 ドイツの尋常一年生〕

いきなりそんな悪い叫びを

投げつけるのはいつたいたれだ

けれども尋常一年生だ

夜中を過ぎたいまごろに

こんなにはつちり眼をあくのは

ドイツの尋常一年生だ)

あいつはこんなさびしい停車場を

たつたひとりで通つていつたらうか

どこへ行くともわからないその方向を
どの種類の世界へはいるともしれないそのみちを
たつたひとりてさびしくあるいて行つたらうか

(草や沼やです)

一本の木もです)

(ギルちゃんまつさをになつてすわつてゐたよ)

(こおんなにして眼は大きくあいてたけど)

ぼくたちのことはまるでみえないやうだつたよ)

(ナ「ガラがね 眼をぢつとこんな赤くして

だんだん環をちいさくしたよ こんなに)

(し、環をお切り そら 手を出して)

(ギルちゃん青くてすきとほるやうだつたよ)

(鳥がね、たくさんたねまきのときのやうに

ばあつと空を通つたの

でもギルちゃんだまつてゐたよ)

(お日さまあんまり變に飽いるだつたわねえ)

(ギルちゃんちつともぼくたちのことみないんだもの

ぼくほんたうにつらかつた)

(さつきおもだかのとこであんまりはしやいでたねえ)

(どうしてギルちゃんぼくたちのことみなかつたらう

忘れたらうかあんなにいつしよにあそんだのに)

かんがへださなければならぬことは

どうしてもかんがへださなければならぬ

とし子はみんなが死ぬとなづける

そのやりかたを通つて行き
 それからさきどこへ行つたかわからない
 それはおれたちの空間の方向ではかられない
 感ぜられない方向を感じやうとするときは
 たれだつてみんなぐるぐるする

〔耳ごうど鳴つてさつぱり聞けなくなつたんちやい〕

さう甘へるやうに言つてから
 たしかにあいつはじぶんのまはりの
 眼にははつきりみえてゐる
 なつかしいひとたちの聲をきかなかつた
 にはかに呼吸がとまり脈がうたなくなり
 それからわたくしがはしつて行つたとき

あのきれいな眼が
 なにかを索めるやうに空しくうごいてゐた
 それはもうわたくしたちの空間を二度と見なかつた
 それからあとであいつはなにを感じたらう
 それはまだおれたちの世界の幻視をみ
 おれたちのせかいの幻聴をきいたらう
 わたくしがその耳もとで
 遠いところから聲をとつてきて
 そらや愛やりんどや風、すべての勢力のたのしい根源
 萬象同歸のそのいみじい生物の名を
 ちからいつばいちからいつばい叫んだとき
 あいつは二へんうなづくやうに息をした

白い尖つたあごや頬がゆすれて
ちいさいときよくおどけたときにしたやうな
あんな偶然な顔つきにみえた
けれどもたしかにうなづいた

（ヘツケル博士！

わたくしがそのありがたい證明の
任にあたつてもよろしうございます）

假睡かすい硅酸けいさんの雲のなかから

凍らすやうなあんな卑怯な叫び聲は……

（宗谷海峡を越える晩は

わたくしは夜どほし甲板に立ち

あたまは具へなく陰温の霧をかぶり

からだはけがれたねがひにみだし

そしてわたくしはほんたうに挑戦しやう）

たしかにあのときはうなづいたのだ

そしてあんなにつぎのあさまで

胸がほとつてゐたくらゐだから

わたくしたちが死んだといつて泣いたあと

とし子はまだまだこの世かいのからだを感じ

ねつやいたみをはなれたほのかなねむりのなかで

ここでみるやうなゆめをみてゐたかもしれぬ

そしてわたくしはそれらのしづかな夢幻が

つぎのせかいへつゞくため

明るいいゝ匂のするものだったことを

どんなにねがふかわからない
 ほんたうにその夢の中のひとくさりは
 かん護とかなしみとにつかれて睡つてゐた
 おしげ子たちのあけがたのなかに
 ぼんやりとしてはいつてきた

（黄いろな花こ おらもとるべがな）

たしかにとし子はあるあけがたは
 まだこの世かいのゆめのなかにゐて
 落葉の風につみかさねられた
 野はらをひとりあるきながら
 ほかのひとのこのことやうにつぶやいてゐたのだ
 そしてそのままさびしい林のなかの

いつびきの鳥になつただらうか

I'estudiantina を風にききながら

水のながれる暗いはやしのなかを
 かなしくうたつて飛んで行つたらうか
 やがてはそこに小さなプロペラのやうに
 音をたてゝ飛んできたあたらしいともだちと
 無心のとりのうたをうたひながら
 たよりなくさまよつて行つたらうか

わたくしはどうしてもさう思はない

なぜ通信が許されないのか

許されてゐる、そして私のうけとつた通信は
 母が夏のかん病のよるにゆめみたとおなじだ

どうしてわたくしはさうなのをさうと思はないのだらう
 それらひとのせかいのゆめはうすれ
 あかつきの薔薇いろをそらにかんじ
 あたらしくさはやかな感官をかんじ
 日光のなかのけむりのやうな羅うろをかんじ
 かがやいてほのかにわらひながら
 はなやかな雲やつめたいにほひのあひだを
 交錯するひかりの棒を過ぎり
 われらが上方とよぶその不可思議な方角へ
 それがそのそのやうであることにおどろきながら
 大循環の風よりもさはやかにのぼつて行つた
 わたくしはその跡をさへたづねることができ

そこに碧い寂かな湖水の面をのぞみ
 あまりにもそのたひらかさとかがやきと
 未知な全反射の方法と
 さめざめとひかりゆすれる樹の列を
 ただしくうつすことをあやしむ
 やがてはそれがおのづから研かれた
 天のる璃の地面と知つてこゝろわななき
 紐になつてながれるそらの楽音
 また瓔珞やあやしいうすものをつけ
 移らずしかもしづかにゆききする
 巨きなすあしの生物たち
 速いほのかな記憶のなかの花のかほり

それらのなかにしづかに立つたらうか
 それともおれたちの聲を聴かないのち
 暗紅色の深くもわるいがらん洞と
 意識ある蛋白質の碎けるときにあける聲
 亞硫酸や笑氣せうきのほひ
 これらをそこに見るならば
 あいつはその中にまつ青になつて立ち
 立つてゐることもよめいてゐるともわからず
 頬に手をあててゆめそのもののやうに立ち
 (わたくしがいまごろこんなものを感じるこゝが
 いつたいほんたうのことだらうか
 わたくしといふものがこんなものをみるこゝが

いつたいありうることだらうか
 (そしてほんたうにみてゐるのだ)と
 斯ういつてひとりなげくかもしれない……
 わたくしのこんなさびしい考は
 みんなよるのためにでるのだ
 夜があけて海岸へかかるなら
 そして波がきらきら光るなら
 なにもかもみんないかもしれない
 けれどもとし子の死んだことならば
 いまわたくしがそれを夢でないと考へて
 あたらしくぎくつとしなければならぬほどの
 あんまりひどいげんじつなのだ

感ずることのあまり新鮮にすぎるとき
 それをがいねん化することは
 きちがひにならないための
 生物体の一つの自衛作用だけれども
 いつでもまもつてばかりゐてはいけない
 ほんたうにあいつはこの感官をうしなつたのち
 あらたにごんなからだを得
 ごんな感官をかんだだらう
 なんべんこれがかんがへたことか
 ひかしからの多数の實驗から
 俱舎がさつきのやうに云ふのだ
 二度とこれをくり返してはいけない

おもては軟玉と銀のモナド
 半月の噴いた瓦斯でいつぱいだ
 卷積雲のはらわたまで
 月のあかりはしみわたり
 それはあやしい螢光板になつて
 いよいよあやしい苹果の匂を發散し
 なめらかにつめた窓硝子さへ越えてくる
 青森だからといふのではなく
 大てい月がこんなやうな曉ちかく
 卷積雲にはいるとき……
 (おいおい、あの顔いろは少し青かつたよ)
 だまつてゐる

おれのいもうこの死顔が
 まつ青だらうが黒からうが
 きさまにどう斯う云はれるか
 あいつはどとへ墮ちやうと
 もう無上蓮に屬してゐる
 力にみちてそこを進むものは
 どの空間にても勇んでとひこんで行くのだ
 ぢきもう東の鋼もひかる
 ほんたうにけふの…きのふのひるまなら
 おれたちはあの重い赤いボムブを…

（もひとつきかせてあげやう

ね じつさいね

あのときの眼は白かつたよ
 すぐ瞑りかねてゐたよ

まだいつてゐるのか
 もうぢきよるはあけるのに
 すべてあるがごとくにある
 かゞやくごとくにかがやくもの
 おまへの武器やあらゆるものは
 おまへにくらくおそろしく
 まことはたのしくあかるいのだ

（みんなむかしからのきやうだいなのだから
 けつしてひとりをいのつてはいけな）

ああ わたくしはけつしてさうしませんでした

あいつがなくなつてからあとのよるひる
わたくしはただの一どたりと
あいつだけがいいところに行けばいいと
さういのりはしなかつたとおもひます

オホーツク挽歌

228
海面は朝の炭酸のためにすつかり錆びた
緑青ろくせうのともあれは藍銅アズライトのともある
むかふの波のちぢれたあたりはずるぶんひごい瑠璃るり液えきだ

229
チモシイの穂がこんなにもぢかくなつて
かはるがはるかぜにふかれてゐる
(それは青いいろのピアノの鍵で
かはるがはる風に押されてゐる)
あるひはみぢかい變種だらう
しづくのなかに朝顔が咲いてゐる
モーニンググローリのそのグローリ
いまさつきの曠原風の荷馬車がくる
年老つた白い重挽馬は首を垂れ
またこの男のひとのよさは
わたくしがさつきあのがらんとした町かどで
濱のいちばん賑やかなところはどこですかときいた時

そつちだらう、向ふには行つたことがないからと
さう云つたことでもよくわかる
いまわたくしを親切なよこ目でみて

(その小さなレンズには

たしか樺太の白い雲もうつつてゐる)

朝顔よりはむしろ牡丹ピオニアのやうにみえる

おほきなはまばらの花だ

まつ赤な朝のはまなすの花です

ああこれらのするどい花のにほひは

もうどうしても 妖精のしわざだ

無数の藍いろの蝶をもたらし

またちいさな黄金の槍の穂

軟玉の花瓶や青い簾

それにあんまり雲がひかるので

たのしく激しいめまぐるしさ

馬のひづめの痕が二つづつ

ぬれて寂まつた褐砂の上についてゐる

もちろん馬だけ行つたのではない

広い荷馬車のわだちは

こんなに淡いひとつづり

波の來たあとの白い細い線に

小さな蚊が三疋さまよひ

またほのぼのと吹きとばされ

貝殻のいぢらしくも白いかけら

萱草の青い花軸が半分砂に埋もれ
波はよせるし砂を巻くし

白い片岩類の小砂利に倒れ
波できれいにみがかれた
ひとときの貝殻を口に含み
わたくしはしばらくねむらうとおもふ
なぜならさつきあの熟した黒い實のついた
まつ青なこけももの上等の敷物カベットと
おほきな赤いはまばらの花と
不思議な釣鐘草フシイベルとのなかで

サガレンの朝の妖精にやつた
透明なわたくしのエネルギーを
いまこれらの濤のおとや
しめつたにほひのいい風や
雲のひかりから恢復しなけばならないから
それにだいいちいまわたくしの心象は
つかれのためにすつかり青ざめて
眩ゆい緑金にさへなつてゐるのだ
日射しや幾重の暗いそらからは
あやしい鐘鼓の蕩音さへする

わびしい草穂やひかりのもや
 緑青は水平線までうららかに延び
 雲の累帯構造のつぎ目から
 一きれのぞく天の青
 強くもわたくしの胸は刺されてゐる
 それらの二つの青いいろは
 どちらもとし子のもつてゐた特性だ
 わたくしが樺太のひとのない海岸を
 ひとり歩いたり疲れて睡つたりしてゐるとき
 とし子はあの青いところのはてにゐて
 なにをしてゐるのかわからない
 と、松やえぞ松の荒さんだ幹や枝が

ごちやごちや漂ひ置かれたその向ふで
 波はなんべんも巻いてゐる
 その巻くために砂が湧き
 潮水はさびしく濁つてゐる

(十一時十五分、その蒼じろく光る盤面)

鳥は雲のこつちを上下する
 ここから今朝舟が滑つて行つたのだ
 砂に刻まれたその船底の痕と
 巨きな横の臺木のくぼみ
 それはひとつの曲つた十字架だ
 幾本かの小さな木片で

HELLと書きそれをLOVEとなほし

ひとつの十字架をたてることは
よくたれでもがやる技術なので
とし子がそれをならべたとき
わたくしはつめたくわらつた

(貝がひととき砂にうづもれ

白いそのふちばかり出てゐる)

やうやく乾いたばかりのこまかな砂が
この十字架の刻みのなかをながれ
いまはもうごんごん流れてゐる
海がこんな青いのに
わたくしがまだとし子のことを考へてゐると
なぜやまへはそんなにひとりばかりの妹を

悼んでゐるかと遠いひとびとの表情が言ひ
またわたくしのなかでいふ

(Casual observer! Superficial traveler!)

空があんまり光ればかへつてがらんと暗くみえ
いまするどい羽をした三羽の鳥が飛んでくる
あんなにかなしく啼きだした
なにかしらせをもつてきたのか
わたくしの片つ方のあたまは痛く
遠くなつた榮濱の屋根はひらめき
鳥はただ一羽硝子笛を吹いて
玉髓の雲に漂つていく
町やとはばのさららかさ

その背のなだらかな丘陵の鴉いろは

いちめんのやなぎらんの花だ

爽やかな苹果青の草地と

黒緑とどまつの列

(ナモサダルマブフンダリカサストラ)

五匹のちいさないそしが

海の巻いてくるときは

よちよちとはせて逃げ

(ナモサダルマブフンダリカサストラ)

浪がたひらにひくときは

砂の鏡のうへを

よちよちとはせてでる

樺太鐵道

やなぎらんやあかつめくさの群落

松脂岩薄片のけむりがただよひ

鈴谷山脈は光霧か雲かわからない

(灼かれた馴鹿の黒い頭骨は

線路のよこの赤砂利に

ごく敬虔に置かれてゐる)

そつと見てごらんなさい

やなぎが青くしげつてふるえてゐます

きつとボラリスやなぎですよ

お満艦飾のこのえぞにふの花

月光いろのかんざしは

すなほなコロボックルのです

(ナモサダルマブフンダリカサストラ)

Vant Hoff の雲の白髪の高さ

崖にならぶものはセントスチユラルバ聖白樺

青びかり野はらをよぎる細流

それはツンドラを截り

(光るのは電しんばしらの碍子)

夕陽にすかし出されると

その緑金の草の葉に

ごく精巧ないちいちの葉脈

(樺の微動のうつくしさ)

黒い木柵も設けられて

やなぎらんの光の點綴

(こゝいらの樺の木は

焼けた野原から生えたので

みんな大乘風の考をもつてゐる)

にせもの的大乗居士どもをみんな灼け

太陽もすこし青ざめて

山脈の縮れた白い雲の上にかかり
 列車の窓の稜のひととこが
 プリズムになつて日光を反射し
 草地に投げられたスペクトル

(雲はさつきからゆつくり流れてゐる)

日さへまもなくかくされる
 かくされる前には感應により
 かくされた后には威神力により
 まばゆい白金環がでさるのだ

(ナマサダルマブフンダリカサストラ)

たしかに日はいま羊毛の雲にはいらうとして
 サガレンの八月のすきとほつた空気を

やうやく葡萄の果汁のやうに
 またフレツプスのやうに甘くはつかうさせるのだ
 そのためにえぞにふの花が一さう明るく見え
 松毛虫に食はれて枯れたその大きな山に
 桃いろな目光もそそぎ

すべて天上技師 Nature 氏の
 ごく斬新な設計だ

山の襞のひとつのかけは

緑青のゴーシユ四邊形

そのいみじい玲瓏のなかに
 からすが飛ぶと見えるのは
 一本のごくせいの高いとごまつの

風に削り残された黒い梢だ

(ナモサダルマブフンダリカサストラ)

結晶片岩山地では

燃えあがる雲の銅粉

(向ふが燃えればもえるほど)

ここらの樺ややなぎは暗くなる)

こんなすてきな瑪瑙の天蓋

その下ではぼろぼろの火雲が燃えて

一きれはもう練金の過程を了へ

いまにも結婚しさうにみえる

(濁つてしづまる天の青らむ一かけら)

いちめんいちめん海蒼のチモシイ

めぐるものは神経質の色丹松

またえぞにふと桃花心木の柵

こんなに青い白樺の間に

鉋をかけた立派なうちをたてたので

これはおれのうちだぞと

その顔の赤い愉快な百姓が

井上と少しびつこに大きく壁に書いたのだ

鈴谷平原

蜂が一びき飛んで行く

琥珀細工の春の器械

蒼い眼をしたすがるです

(私のどこへあらはれたその蜂は

ちやんと拋物線の圖式にしたがひ

さびしい未知へとんでいつた)

チモシイの穂が青くたのしくゆれてゐる

それはたのしくゆれてゐるといつたところて

莊嚴ミサや雲環うんくわんとおなじやうに

うれひや悲しみに對立するものではない

だから新らしい蜂がまた一疋飛んできて

ぼくのまはりをとびめぐり

また茨や灌木にひつかかれた

わたしのすあしを刺すのです

こんなうるんで秋の雲のとぶ日

鈴谷平野の荒さんだ山際の焼け跡に

わたくしはこんななたのしくすわつてゐる

ほんたうにそれらの焼けたとまがつが

まつすぐに天に立つて加奈太式に風にゆれ

また夢よりもたかくのびた白樺が

青ぞらにわづかの新葉をつけ

三稜玻璃にもまれ

(うしろの方はまつ青ですよ

クリスマスツリーに使ひたいやうな

あをいまつ青いとどまつが
いつばいに生えてゐるのです)

いちめんのやなぎらんの群落が
光ともやの紫いろの花をつけ
遠くから近くからけむつてゐる

(さはしぎも啼いてゐる

たしかさはしぎの發動機だ)

こんやはもう標本をいつばいもつて

わたくしは宗谷海峡をわたる

だから風の音が汽車のやうだ

流れるものは二條の茶

蛇ではなくて一びきの栗鼠

いぶかしさうにこつちをみる

(こんどは風が

みんなのがやがやしたはなし聲にきこえ

うしろの遠い山の下からは

好摩の冬の青ぞらから落ちてきたやうな

すきとほつた大きなせきばらひがする

これはサガレンの古くからの誰かだ)

噴火灣(ノクターン)

稚いえんどうの澱粉や緑金が

どこから来てこんなに照らすのか

(車室は軋みわたくしはつかれて睡つてゐる)

とし子は大きく眼をあいて

烈しい薔薇いろの火に燃されながら

(あの七月の高い熱……)

鳥が棲み空気の水のやうな林のことを考へてゐた

(かんがへてゐたのか)

いまかんがへてゐるのか)

車室の軋りは二疋の栗鼠

(ごとしは勤めにそとへ出てゐないひとは

みんなかはるがはる林へ行かう)

赤銅の半月刀を腰にさげて

どこかの生意氣なアラビヤ酋長が言ふ

七月末のそのころに

思ひ餘つたやうにとし子が言つた

(おらあと死んでもいゝはんて

あの林の中さ行くだい

うごいで熱は高くなつても

あの林の中でだらほんとは死んでもいいはんて)

鳥のやうに栗鼠のやうに

そんなさはやかな林を戀ひ

(栗鼠の軋りは水車の夜明け

大きなくなるみの木のしただ)

一千九百二十三年の

とし子はやさしく眼をみひらいて

透明薔薇の身熱から

青い林をかんがへてゐる

ファゴットの聲が前方にし

Funeral march があやしくいままたはじまり出す

(車室の軋りはかなしみの二正の栗鼠)

(栗鼠お魚たべあんすのすか)

(二等室のガラスは霜のもやう)

もう明けがたに遠くない

崖の木や草も明らかに見え

車室の軋りもいつかかすれ

一びきのちいさなちいさな白い蛾が

天井のあかしのあたりを這つてゐる

(車室の軋りは天の楽音)

噴火灣のこの黎明の水明り

室蘭通ひの汽船には

二つの赤い灯がともり

東の天末は濁つた孔雀石の縞

黒く立つものは樺の木と楊の木

駒ヶ岳駒ヶ岳

暗い金属の雲をかぶつて立つてゐる

そのまつくらな雲のなかに

とし子がかくされてゐるかもしれぬ

ああ何べん理智が教へても
私のさびしさはなほらない
わたくしの感じないちがつた空間に
いままでここにあつた現象がうつる
それはあんまりさびしいことだ

(そのさびしいものを死といふのだ)
たとへそのちがつたさびやかな空間で
とし子がしづかにわらはうと
わたくしのかなしみにいぢけた感情は
どうしてもどこかにかくされたとし子をおもふ

風景ミオルゴール

不貪慾戒

油紙を着てぬれた馬に乗り
つめたい風景のなか、暗い森のかげや
ゆるやかな環状削剝の丘、赤い萱の穂のあひだを
ゆつくりあるくといふこともいゝし
黒い多面角の洋傘をひろげ
砂糖糖を買ひに町へ出ることも
ごく新鮮な企畫である

(ちらけろちらけろ 四十雀)

粗剛なオリザサチバといふ植物の人工群落
が
タアアアさへもほしがりさうな

上等のさらどの色になつてゐることは

慈雲尊者にしたがへば

不貧慾戒のすがたです

(ちらけるちらける 四十雀)

そのときの高等遊民は

いましつかりした執政官だ)

ことごとと寂しさを噴く暗い山に

防火線のひらめく灰いろなども

慈雲尊者にしたがへば

不貧慾戒のすがたです

雲ごはんのき

雲は羊毛とちぢれ

黒緑赤楊のモザイク

またなかぞらには氷片の雲がうかび

すすきはさらつと光つて過ぎる

(北ぞらのちぢれ羊から

おれの崇敬は照り返され

天の海と窓の日おほひ

おれの崇敬は照り返され)

沼はきれいに鮑をかけられ

朧ろな秋の水ゾルと

つめたくぬるぬるした葎菜じゆんとから組成され

ゆふべ一晚の雨でできた

陶庵だか東庵だかの蒔繪の

精製された水銀の川です

アマルガムにさへならなかつたら

銀の水車でもまはしていい

無細工な銀の水車でもまはしていい

(赤紙をはられた火薬車だ

あたまたの奥ではもうまつ白に爆発してゐる)

無細工の銀の水車でもまはすがいい

カフカズ風に帽子を折つてかぶるもの

感官のさびしい益虚のなかで

貨物車輪の裏の秋の明るさ

(ひのきのひらめく六月に

おまへが刻んだその線は

やがてどんな重荷になつて

おまへに男らしい償ひを強ひるかわからない)

手宮文字です 手宮文字です

こんなにそらがくもつて来て

山も大へん光つて青くくらくなり

豆畑だつてほんたうにかなしいのに

わづかにその山稜と雲との間には
 あやしい光の微塵にみちた
 幻惑の天がのぞき
 またそのなかにはかがやきまばゆい積雲の一行が
 ころも遠くならんでゐる
 これら葬送行進曲の層雲の底
 鳥もわたらない清澄な空間を
 わたくしはたつたひとり
 つぎからつぎと冷たいあやしい幻想を抱きながら
 一挺のかなづちを持つて
 南の方へ石灰岩のいい層を
 さがしに行かなければなりません

宗教風の戀

がさがさした稻もやさしい油緑ゆりくに熟し
 西ならあんな暗い立派な霧でいつばい
 草穂はいちめん風で波立つてゐるのに
 可哀さうなおまへの弱いあたまは
 くらくらするまで青く乱れ
 いまに太田武か誰かのやうに
 眼のふちもぐちやぐちやになつてしまふ

ほんたうにそんな偏つて尖つた心の動きかたのくせ
 なぜこんなにすきとほつてきれいな氣層のなから
 燃えて暗いなやましいものをつかまへるか
 信仰でしか得られないものを
 なぜ人間の中でしつかり捕へやうとするか
 風はどうどう空で鳴つてるし
 東京の避難者たちは半分腦膜炎になつて
 いまでもまいにち遁げて來るのに
 ごうしておまへはそんな醫される筈のなかなしみを
 わざとあかるいそらとるか
 いまはもうさうしてゐるときでない
 けれども悪いとかいゝとか云ふのではない

あんまりおまへがひどからうとおもふので
 みかねてわたしはいつてゐるのだ
 さあなみだをふいてきちんとたて
 もうそんな宗教風の戀をしてはいけない
 そこはちやうど兩方の空間が二重になつてゐるところで
 おれたちのやうな初心のものに
 居られる場處では決してない

風景ミオルゴール

わづかにその山稜と雲との間には

爽かなくだもののにほひに充ち
つめたくされた銀製の薄明穹を
雲がどんどんかけてゐる
黒曜ひのきやサイプレスの中を
一疋の馬がゆつくりやつてくる
ひとり農夫が乗つてゐる
もちろん農夫はからだ半分ぐらゐ
木だちやそこらの銀のアトムに溶け
またじぶんでも溶けてもいいとおもひながら
あたまの大きな曖昧な馬といつしよにゆつくりくる
首を垂れておとなしくがさがさした南部馬
黒く巨きな松倉山のこつちに

一點のダアリア複合体
その電燈の企畫なら
じつに九月の寶石である
その電燈の献策者に
わたくしは青い蕃茄を贈る
どんなにこれらのぬれたみちや
クレオソートを塗つたばかりのらんかんや
電線も二本にせものの虚無のなかから光つてゐるし
風景が深く透明にされたかわからない
下では水がごろごろ流れて行き
薄明穹の爽かな銀と苹果とを
黒白鳥のむな毛の塊が奔り

(ああ お月さまが出てゐます)

ほんたうに鋭い秋の粉や

玻璃末の雲の稜に磨かれて

紫磨銀彩に尖つて光る六日の月

橋のらんかんには雨粒がまだいつばいついてゐる

なんといふこのなつかしさの湧あがり

水はおとなしい膠朧体だし

わたくしはこんな過透明な景色のなかに

松倉山や五間森荒つぼい石英安山岩の岩頸から

放たれた剽悍な刺客に

暗殺されてもいいのです

(たしかにわたくしがその木をきつたのだから)

(杉のいただきは黒くそらの椀を刺し)

風が口笛をはんぶんちぎつて持つてくれば

(氣の毒な二重感覺の機關)

わたくしは古い印度の青草をみる

崖にぶつつかるそのへんの水は

葱のやうに横に外れてゐる

そんなに風はうまく吹き

半月の表面はきれいに吹きはらはれた

だからわたくしの洋傘は

しばらくばたばた言つてから

ぬれた橋板に倒れたのだ

松倉山松倉山尖つてまつ暗な悪魔蒼鉛の空に立ち

電燈はよほど熟してゐる

風がもうこれつきり吹けば

まさしく吹いて来る劫のはじめの風

ひとときれそらにうかぶ曉のモテイロー

電線と恐ろしい玉髓キヤルセドニの雲のされ

そこから見當のつかない大きな青い星がうかぶ

(何べんの戀の償ひだ)

そんな恐ろしいがまいろの雲と

わたくしの上着はひるがへり

(オルゴールをかけるかける)

月はいきなり二つになり

盲ひた黒い暈をつくつて光面を過ぎる雲の一群

(しづまれしづまれ五間森

木をさらられてもしづまるのだ)

風の偏倚

風が偏倚して過ぎたあとでは

クレオソートを塗つたばかりの電柱や

逞しくも起伏する暗黒山陵あんこくさんりやうや

(虚空は古めかしい月げつ朧らうにみち)

研ぎ澄まされた天河石天盤の半月

すべてこんな錯綜した雲やそらの景觀が
すきとほつて巨大な過去になる

五日の月はさらに小さく副生し

意識のやうに移つて行くちぎれた蛋白彩の雲

月の尖端をかすめて過ぎれば

そのまん中の厚いところは黒いのです

(風と嘆息との中^{なか}にあらゆる世界の因子^{いんし}がある)

きららかにきらびやかにみだれて飛ぶ断雲と

星雲のやうにうごかない天盤^{てんぱん}附屬の氷片の雲

(それはつめたい虹をあげ)

いま^{いま}硫酸の雲の大部が行き過ぎやうとするために

みちはなんべんもくらくなり

(月あかりがこんなにみちにふると

まへにはよく硫黄のほひがのぼつたのだが

いまはその小さな硫黄の粒も

風や酸素に溶かされてしまつた)

じつに空は底のしれない洗ひがけの虚空で

月は水銀を塗られたてこぼこの噴火口からできてゐる

(山もはやしもけふはひじやうに峻儼だ)

どんだん雲は月のおもてを研いで飛んでゆく

ひるまのはげしくすさまじい雨が

微塵からなにからすつかりとつてしまつたのだ

月の彎曲の内側から

白いあやしい氣體が噴かれ

そのために却つて一きれの雲がとかされて

(杉の列はみんな黒真珠の保護色)

そらそら、B氏のやつたあの虹の交錯や顔ひと

苹果の未熟なハロウとが

あやしく天を覆ひだす

杉の列には山鳥がいつぱいに潜^{ひそ}み

ベガススのあたりに立つてゐた

いま雲は一せいに散兵をしき

極めて堅實にすすんで行く

おゝ私のうしろの松倉山には

用意された一萬の矽化流紋凝灰岩の弾塊があり

川尻断層のときから息を殺してまつてゐて

私が腕時計を光らし過ぎれば落ちてくる

空氣の透明度は水よりも強く

松倉山から生えた木は

敬虔に天に祈つてゐる

辛うじて赤いすすきの穂がゆらぎ

(どうしてどうして松倉山の木は

ひどくひどく風にあらびてゐるのだ

あのごとごといふのがみんなそれだ)

呼吸のやうに月光はまた明るくなり

雲の遷色とダムを超える水の音

わたしの帽子の静寂と風の塊

いまくらくなり電車の單線ばかりまつすぐくのび

レールとみちの粘土の可塑性
月はこの變厄のあひだ不思議な黄いろになつてゐる

昂

沈んだ月夜の楊の木の梢に
二つの星が逆さまにかかる

(昂すはるがそらでさう云つてゐる)

オリオンの幻怪と青い電燈
また農婦のよろこびの

たくましも赤い頬

風は吹く吹く、松は一本立ち

山を下る電車の奔り

もし車の外に立つたらはねとばされる

山へ行つて木をきつたものは

どうしても歸るときは肩身がせまい

(ああもろもろの徳は善逝スガタから来て

そしてスガタにいたるのです)

腕を組み暗い貨物電車の壁による少年よ

この籠で今朝鶏を持つて行つたのに

それが賣れてこんどは持つて戻らないのか

そのまつ青な夜のそば畑のうつくしさ

電燈に照らされたそばの畑を見たことがありますか
市民諸君よ

おちきやうだい、これはおまへの感情だな
市民諸君よなんてふざけたものの云ひやうをするな
東京はいま生きるか死ぬかの堺なのだ

見たまへこの電車だつて

軌道から青い火花をあけ

もう蝸かドラゴかもわからず

一心に走つてゐるのだ

(豆ばたけのその喪神きんのあざやかさ)

どうしてもこの貨物車の壁はあぶない

わたくしが壁といつしよにここらあたりで

投げだされて死ぬことはあり得過ぎる

金をもつてゐるひとは金があてにならない

からだの丈夫なひとはごろつとやられる

あたまのいいものはあたまが弱い

あてにするものはみんなあてにならない

たゞもろもろの徳ばかりこの巨きな旅の資糧で

そしてそれらもろもろ徳性は

善逝スガタから來て善逝スガタに至る

第四梯形

青い抱擁衝動や

明るい雨の中のみたされないう唇が
きれいにそらに溶けてゆく

日本の九月の氣圏てす

そらは霜の織物をつくり

萱の穂の満潮

(三角山はひかりにかすれ)

あやしいそらのバリカンは

白い雲からおりて来て

早くも七つ森第一梯形の

松と雑木を刈りおとし

野原がうめばちさうや山羊の乳や

沃度の匂で荒れて大へんかなしいとき

汽車の進行ははやくなり

ぬれた赤い崖や何かといつしよに

七つ森第二梯形の

新鮮な地被が刈り拂はれ

手帳のやうに青い卓狀臺地は

まひるの夢をくすぼらし

ラテライトのひどい崖から

梯形第三のすさまじい羊齒や

こならやさるとりいばらが滑り

(おお第一の紺青の寂寥)

縮れて雲はざらざら光り

とんぼは萱の花のやうに飛んでゐる

(萱の穂は満潮)

萱の穂は満潮)

一本さびしく赤く燃える栗の木から

七つ森の第四伯林青スロープは

やまなしの匂の雲に起伏し

すこし日射しのくらむひまに

そらのバリカンがそれを刈る

(腐植土のみちと天の石墨)

夜風太郎の配下と子孫とは

大きな帽子を風にうねらせ

落葉松のせわしい足なみを

しきりに馬を急がせるうちに

早くも第六梯形の暗いリバライトは

ハックニーのやうに刈られてしまひ

ななめに琥珀の陽も射して

(たうたうぼくは一つ勘定をまちがへた)

第四か第五かをうまくそらからごまかされた)

どうして決して、そんなことはない

いまきらめきだすその真鍮の畑の一片から

明暗交錯のむかふにひそむものは

まさしく第七梯形の

雲に浮んだその最後のものだ

緑青を吐く松のむさくるしさ

ちぢれて悼む 雲の羊毛

(三角やまはひかりにかすれ)

火薬と紙幣

萱の穂は赤くならび

雲はカシユガル産の苹果の果肉よりもつめたい

鳥は一ぺんに飛びあがつて

ラツグの音譜をばら撒きだ

古枕木を灼いてこさえた

284

285

黒い保線小屋の秋の中では

四面体聚形しゅうけいの一人の工夫が

米國風のブリキの罐で

たしかメリケン粉を涅ぬねてゐる

鳥はまた一つまみ、空からばら撒かれ

一ぺんつめたい雲の下で展開し

こんどは巧に引力の法則をつかつて

遠いギリヤークの電線にあつまる

赤い碍子のうへにゐる

そのきのどくなすゞめども

口笛を吹きまた新らしい濃い空気を吸へば

たれでもみんなきのどくになる

森はどれも群青に泣いてゐるし
 松林なら地被もところどころ剥げて
 酸性土壤ももう十月になつたのだ

私の着物もすつかり thread-bare

その陰影のなかから

逞ましい向ふの土方がくしやみをする

氷河が海にはいるやうに

白い雲のたくさん流れは

枯れた野原に注いでゐる

だからわたくしのふだん決して見ない

小さな三角の前山なども

はつきり白く浮いてでる

栗の梢のモザイクと

鐵葉細工のやなぎの葉

水のそばでは堅い黄いろなまるめるが

枝も裂けるまで實つてゐる

(こんどばら撒いてしまつたら……)

ふん、ちやうど四十雀のやうに)

雲が縮れてきらきら光るとき

大きな帽子をかぶつて

野原をおほひらにあるけたら

おれはそのほかにもうなんにもいらぬ

火薬も燐も大きな紙幣もほしくない

過去情炎

288

截られた根から青じろい樹液がにじみ
あたらしい腐植のにほひを嗅ぎながら
きらびやかな雨あがりの中にはたらけば
わたくしは移住の清教徒ピュリタンです
雲はぐらぐらゆれて馳けるし
梨の葉にはいちいち精巧な葉脈があつて
短果枝には雫がレンズになり
そらや木やすべての景象ををさめてゐる

289

わたくしがここを環に堀つてしまふあひだ
その雫が落ちないことをねがふ
なぜならいまこのちいさなアカシヤをとつたあとで
わたくしは鄭重ていじゆうにかがんでそれに唇をあてる
えりおりのシヤツやぼろぼろの上着をきて
企らむやうに肩をはりながら
そつちをぬすみみてゐれば
ひじやうな悪漢わるあいつにもみえやうが
わたくしはゆるされるとおもふ
なにもかもみんなたよりなく
なにもかかもみんなあてにならない
これらげんしやうのせかいのなかで

そのたよりのない性質が
 こんなきれいな露になつたり
 いぢけたちいさなまゆみの木を
 紅にからやさしい月光いろまで
 豪華な織物に染めたりする
 そんならもうアカシヤの木もほりごられたし
 いまはまんどくしてたうぐわをおき
 わたくしは待つてゐたこひびとにあふやうに
 應揚おこにわらつてその木のしたへゆくだけけれども
 それはひとつの情炎じやうえんだ
 もう水いろの過去になつてゐる

一本木野

松がいきなり明るくなつて
 のはらがばつとひらければ
 かぎりなくかぎりなくかれくさは日に燃え
 電信ばしらはやさしく白い碍子をつらね
 ペーリング市までつづくとおもはれる
 すみわたる海蒼あざの天と
 きよめられるひとのねがひ
 からまつはふたたびわかやいで萌え

幻聴の透明なひばり
 七時雨の青い起伏は
 また心象のなかにも起伏し
 ひとむらのやなぎ木立は
 ボルガのきしのそのやなぎ
 天椀の孔雀石にひそまり
 薬師岱赭のきびしくするごいもりあがり
 火口の雪は皺ごと刻み
 くらかけのびんかんな稜は
 青ぞらに星雲をあげる

(おい かしは

てめいのあだなを

やまのたばこの木つていふつてのはほんたうか
 こんなあかるい穹窿と草を
 はんにちゆつくりあるくことは
 いつたいなんといふおんけいだらう
 わたくしはそれをはりつけとでもとりかへる
 こひびとひとめみることでさへさうでないか

(おい やまのたばこの木

あんまりへんなおどりをやると

未来派だつていはれるぜ)

わたくしは森やはらのこひびと
 芦のあひだをがさがさ行けば
 つつましく折られたみどりいろの通信は

喪神のしろいかがみが

薬師火口のいただきにかかり

日かげになつた火山礫堆の中腹から

鎔岩流

いつかぼけつとにはいつてゐるし
 はやしのくらいとこをあるいてゐると
 三日月がたのくちびるのあとで
 眩やずぼんがいつぱいになる

畏るべくかなしむべき碎塊熔岩の黒

わたくしはさつきの柏や松の野原をよぎるときから
 なにかあかるい曠原風の情調を

ばらばらにするやうなひどいけしきが

展かれるとはおもつてゐた

けれどもここは空氣も深い淵になつてゐて

ごく強力な鬼神たちの棲みかだ

一びきの鳥さへも見えない

わたくしがあぶなくその一一の岩塊をふみ

すこしの小高いところへのぼり

さらにつくづくこの焼石のひろがりを見わたせば
 雪を越えてきたつめたい風はみねから吹き

雲はあらはれてつぎからつぎと消え
 いちいちの火山塊の黒いかげ
 貞享四年のちいさな噴火から
 およそ二百三十五年のあひだに
 空氣のなかの酸素や炭酸瓦斯
 これら清冽な試薬によつて
 どれくらゐの風化が行はれ
 どんな植物が生えたかを
 見やうとして私の來たのに對し
 それは恐ろしい二種の〇で答へた
 その白つぼい厚いすぎごけの
 表面がかさかさ乾いてゐるので

わたくしはまた麵麩ともかんがへ
 ちやうどひるの食事をもたないところから
 ひじやうな饗應ともかんずるのだが
 (なぜならたべものといふものは
 それをみてよるこぶもので
 それからあとはたべるものだから)
 ここらでそんなかんがへは
 あんまり潜越かもしれない
 とにかくわたくしは荷物をおろし
 灰いろの苔に靴やからだを埋め
 一つの赤い苹果をたべる
 うるうるしながら苹果に噛みつけば

雪を趣えてきたつめたい風はみねから吹き
 野はらの白樺の葉は紅べにや金きんやせはしくゆすれ
 北上山地はほのかな幾層の青い縞をつくる

(あれがぼくのしやつだ)

青いリンネルの農民シャツだ)

イーハトブの氷霧

けさはじつにはじめての凜々しい氷霧ひやうりだつたから
 みんなはまるめるるやなにかまで出して歓迎した

冬ご銀河ステーション

そらにはちりのやうに小鳥がとび
 かげらふや青いギリシヤ文字は
 せはしく野はらの雪に燃えます
 バッセン大街道のひのきからは
 凍つたしづくが燦々きらきらと降り
 銀河ステーションの遠方シグナルも
 けさはまつ赤かに澱んでゐます

川はどどん氷を流してゐるのに
 みんなは生ゴムの長靴をはき
 狐や犬の毛皮を着て

陶器の露店をひやかしたり

ぶらさがつた章魚を品さだめしたりする

あのにぎやかな土澤の冬の市日です

(はんの木とまばゆい雲のアルコホル

あすこにやどりぎの黄金のゴールが

さめざめとしてひかつてもいい)

あゝ Josef Pasternack の指揮する

この冬の銀河輕便鐵道は

幾重のあえかな氷をくぐり

(でんしんばしらの赤い碍子と松の森)

にせものの金のメタルをぶらさげて

茶いろの腫をりんと張り

つめたく青らむ天椀の下

うららかな雪の臺地を急ぐもの

(窓のガラスの氷の羊齒は

だんだん白い湯氣にかはる)

パツセン大街道のひのきから

しづくは燃えていちめん降り

はねあがる青い枝や

紅玉やトパスまたいろいろのスペクトルや

もうまるで市場のやうな盛んな取引です

春ご修羅

目次

屈折率	……………(一九三、二、六)……………
くらかけの雪	……………(一九三、一、六)……………
日輪と太市	……………(一九三、一、九)……………
丘の幻惑	……………(一九三、一、三)……………
カーバイト倉庫	……………(一九三、一、二)……………
コバルト山地	……………(一九三、一、三)……………
ぬすびと	……………(一九三、三、二)……………
戀と病熱	……………(一九三、三、一〇)……………

三 四 五 六 八 九 一〇 一一

春と修羅	……………(一九三、四、八)……………	三
春光呪咀	……………(一九三、四、一〇)……………	一六
有明	……………(一九三、四、三)……………	一八
谷	……………(一九三、四、一〇)……………	一九
陽ざしとかれくさ	……………(一九三、四、三)……………	二〇
雲の信號	……………(一九三、五、一〇)……………	二三
風景	……………(一九三、五、二)……………	二三
習作	……………(一九三、五、二四)……………	二四
休息	……………(一九三、五、二四)……………	二七
おきなくさ	……………(一九三、五、一七)……………	三〇
かはばた	……………(一九三、五、一七)……………	三

眞空溶媒

眞空溶媒	……………(一九三、五、一八)……………	三五
蠕蟲舞手	……………(一九三、五、一〇)……………	五

小岩井農場

小岩井農場	……………(一九三、五、二)……………	六
-------	---------------------	---

グラント電柱

林と思想	……………(一九三、六、四)……………	二七
------	---------------------	----

霧とマツチ	……………(一九三、六、四)……………	二八
芝生	……………(一九三、六、七)……………	二
青い槍の葉	……………(一九三、六、二二)……………	二〇
報告	……………(一九三、六、二五)……………	二三
風景觀察官	……………(一九三、六、二五)……………	二四
岩手山	……………(一九三、六、二七)……………	二六
叫び	……………(一九三、六、二七)……………	二七
印象	……………(一九三、六、二七)……………	二六
高級の霧	……………(一九三、六、二七)……………	二六
途上二篇	……………(一九三、六、二七)……………	二〇
電車	……………(一九三、八、一七)……………	三三
天然誘接	……………(一九三、八、一七)……………	三三

原體劔舞連	……………(一九三、八、三二)……………	三七
グラウンド電柱	……………(一九三、九、七)……………	三九
山巡查	……………(一九三、九、七)……………	四〇
電線工夫	……………(一九三、九、七)……………	四二
たび人	……………(一九三、九、七)……………	四二
竹と檜	……………(一九三、九、七)……………	四二
銅線	……………(一九三、九、一七)……………	四三
瀧澤野	……………(一九三、九、一七)……………	四四

東岩手火山

東岩手火山	……………(一九三、九、一八)……………	四九
-------	----------------------	----

犬	……………(一九三、九、二七)……………	二六
マサニエロ	……………(一九三、一〇、一〇)……………	二七〇
栗鼠と色鉛筆	……………(一九三、一〇、一五)……………	二七三

無聲慟哭

永訣の朝	……………(一九三、一一、二七)……………	二七九
松の針	……………(一九三、一一、二七)……………	二八四
無聲慟哭	……………(一九三、一一、二七)……………	二八七
風林	……………(一九三、六、三)……………	二九三
白い鳥	……………(一九三、六、四)……………	二九八

オホーツク挽歌

青森挽歌	……………(一九三、八、一)……………	二〇七
オホーツク挽歌	……………(一九三、八、四)……………	二三八
樺太鐵道	……………(一九三、八、四)……………	二三九
鈴谷平原	……………(一九三、八、七)……………	二四五
噴火灣	……………(一九三、八、二一)……………	二四九

風景ごオルゴール

不貧慾戒	……………(一九三、八、二八)……………	二五七
雲とはんのき	……………(一九三、八、三三)……………	二五九

宗教風の戀	……………(一九三、九、一六)……………	二六三
風景とオルゴール	……………(一九三、九、一六)……………	二六五
風の偏倚	……………(一九三、九、一六)……………	二七〇
昂	……………(一九三、九、一六)……………	二七五
第四梯形	……………(一九三、九、三〇)……………	二七六
火薬と紙幣	……………(一九三、九、一〇)……………	二八三
過去情炎	……………(一九三、一〇、一五)……………	九八七
一本木野	……………(一九三、一〇、二八)……………	二九〇
鎔岩流	……………(一九三、一〇、二八)……………	二九三
イーハトヴの氷霧	……………(一九三、一、一三)……………	二九八
冬と銀河鐵道	……………(一九三、一、一〇)……………	二九九

大正十三年三月廿五日印刷
大正十三年四月二十日發行

定價 貳圓四拾錢

春と修羅奥付



著者 檢印

著者 宮澤賢治
 發行者 關根喜太郎
 印刷者 吉田忠太郎
東京市京橋區南鞘町十七番地
岩手縣花卷川口町百九番地

發行所 東京市京橋區南鞘町十七番地 五五七九番 關根書店

正誤表
序 頁 行
七 一

もの、とに
どしどしどし

もとに

正誤表
本 頁 行
九 終

どしどしどしどし

一五三
一三八

柏の本、 柏の木、
力強い 力強い

えるのだ

吠えるのだ

era ora

えだよ えだだよ

inger super

ナマ ナモ

そんな そんなに

そらとるか

そらからとるか

湿地

どこ

ですかな

あに

ならて

ほう

おぼろ

大刀

屋座に

湿地

どて

ですか

なあに

なつて

ほう

おぼろ

太刀

星座に

正誤表
頁 行
三 七

正

